

学校生活における活動および対人関係の傾向と経験が  
大学生の就業に対する動機づけと自己効力感に与える影響

浅井千秋

Influences of Undergraduate Students' Tendencies and Experiences  
on Activities and Relationships in School Life toward Work Motivation  
and Work Self-Efficacy

ASAI Chiaki

**Abstract**

The purpose of this study was to examine influences of undergraduate students' tendencies and experiences on activities and relationships in school life toward work motivation and work self-efficacy. A total of 146 undergraduate students in grade 3 rated a list of items in a questionnaire. Results of factor analysis identified eight factors on tendencies and experiences on activities and relationships in school life ("activity commitment and achievement" and "active interaction with various others", etc.), and four factors on work attitudes ("work importance and motivation" and "self-efficacy in work duty", etc.). Results of regression analysis indicated that "activity commitment and achievement" and "cooperation in groups and social support" positively influence "work importance and motivation" and "self-efficacy in work duty". On the other hand, "exclusive and fixed friendships" and "avoidance of interaction, and acting alone" in addition to the above two factors, had positive influence on "work rejection and lethargy", and "active interaction with various others" while "self-disclosure and sense of authenticity" had a positive relationship with "self-efficacy in relationships".

## 1. 問題

### 1. 大学生のキャリア選択における問題と就業への態度

長期的な不況期において就業者の雇用環境は大きく変化し、多くの企業が非正規雇用や中途採用を拡大すると同時に新規大卒の正規雇用を抑制し、有能な人材を見極めて厳選する傾向にある。その後も景気の変動はあるものの、リーマンショックや東日本大震災、新型コロナ感染の拡大など経済を取り巻く不確実な状況下で、正規雇用を志望する大学生の就職が困難な状況が繰り返されてきた。しかし、こうした厳しい環境においても、就職や職業生活に対して積極的な態度を持つことができない学生の問題が指摘されている(労働政策研究研修機構,2006;下村・木村,1994;古市,1995;若松,2001;杉本,2012;森本,2008;石井・平山・野村・前田・嶋田,2015)。

上記のような問題を背景に、就職を希望する大学生のキャリア選択やその支援に関する研究が多く行われてきた。その中で盛んに取り上げられている概念として、キャリア選択行動に対する自己効力感がある。Taylor & Betz(1983)、Blustein(1989)、浦上(1995)、富安(1997)、安達(2001)は、キャリア選択行動に対する自己効力感の高さがキャリア選択への肯定的な態度や行動と関連することを示している。キャリア支援という観点から見れば、キャリア選択の具体的な行動を明示した上で、それに対する自己効力感を明らかにすれば、キャリア選択に取り組む学生がどのような点で困難を抱えているかを見出すことができ、効果的に支援を行うことが期待できる(富永,2008)。

ただし、就職志望の学生に対して、職業選択の効果的な行動を指導したとしても、後述するように、彼らが働くこと、つまり就業自体(work itself)に対する意欲や自信といった肯定的な態度を持っていなければ、就職活動を積極的にを行うように動機づけることは難しいだろう。

就業者を対象とした産業組織心理学の研究では、就業やキャリアへのモチベーションやコミットメントなど、就業に対する認知や感情、行動傾向の要因に関する研究が数多く行われてきた(Vrrom,1964;Steers,Mowday, & Shapiro,2004;Blau, 1988; Noe,Noe & Bachhuber,1990;Morrow & Wirth,1989;London,1983)。一方、大学生のような未就業者が持つ就業自体に対する態度に関する研究としては、Greenhaus(1973)や Westbrook,O'Neal,Home,Fleenor, & Garren(1985)のキャリア・サリエンス、Nevill & Super(1988)の就業コミットメント、古市(2007)の職業志向傾向、Hirshi, Lee, Porfeli, & Vondracek(2013)のキャリア・モチベーション、Valero & Hirschi(2016)の就業モチベーションなどが挙げられるものの、進路自己効力感の研究と比べて、あまり重視されてこなかった(Hirshi, *et. al.*, 2013)。

しかし、多くの企業は、仕事への意欲や熱意、目的意識や主体性など、就業に対する肯定的な認知や感情、行動傾向を、新規学卒者に求める資質や能力として挙げている(リクルート,1995;岩脇,2008;青谷・三宅,2005;小杉,2007)。実際に、Valero &

Hirschi(2016)は、入職前の就業に対するモチベーションが高いほど、キャリア選択行動への積極性に加えて、見習い期間における就業への適合感やエンゲージメントが高いことを、風間・山下(2019)は、学生時代に仕事で挑戦や努力を望んでいた人ほど、入職1年後の職場における成長感が高いことを明らかにしており、就業に対する上記のような態度は、比較的安定した心理傾向として、キャリア選択の成否だけでなく、入職後の就業生活への適応も含めて、より持続的な影響を与えると考えられる。

そこで本研究では、大学生が持っている就業自体に対する認知や感情、行動傾向のような就業に対する態度とそれを規定する要因を取り上げる。まず初めに、関連する従来の研究知見に基づいて、就業に対する態度の下位要因と、その意味内容を明確にした上で、それに影響を与える要因について検討したい。

先述の Hirshi,*et.al.*(2013)や Valero & Hirschi(2016)は、就業やキャリアへのモチベーションの重要な側面として、熱中や楽しさなど仕事への感情を取り上げ、これが、キャリア選択や見習い期間における就業への肯定的態度の形成を促していたことを明らかにしている。浦上(1994)では、仕事への意欲が進路自己効力感と関連していた。また松本(1993)は、職業上の課題に対する積極的な努力を表す職業達成動機を取り上げ、職業的アイデンティティを確立している学生ほど、職業達成動機が高い傾向にあった。

古市(2007)も、職業自体への積極的態度を表す職業志向傾向という概念を提唱し、大学生の自己実現志向の就業動機との関連を示している。ただし、この尺度には、キャリア選択への行動に関する項目も含まれており、就業自体への態度のみを表してはいない。キャリア発達について心理学的な研究を行った Nevill & Super(1988)や Crites, Wallbrown & Blaha(1985)によるキャリア成熟性においても、働くことへの好意や喜びなどの感情的な関与に関する項目が取り上げられており、彼らの研究に基づいた若林・後藤・鹿内(1983)の職業レディネスや坂柳(1996)の職業キャリア・レディネスの中にも、職業に対する関心や積極性、自発性に関する項目が含まれている。

一方、Lent,Brown,Telleyrand,McPartland,Davis, & Chai(2002)は、大学生がキャリア選択で考慮した要因の1つとして、仕事への興味を挙げ、Rooney & Osipow(1992)は、特定の職業分野についての興味や好意度が高いほど、その分野を真剣に選択肢として考えることを示している。また、Greenhaus(1973)は、人生における職業の重要性と満足感を合わせてキャリア・サリエンスという概念で表し、Westbrook,*et.al.*(1985)は、キャリア・サリエンスをキャリア成熟性の下位要因に含めている。そして、キャリア・サリエンスが高い学生は、理想的な職業に就くことを重視し、自己や職業の理解に肯定的な態度を持つなど、キャリア選択にも積極的であった(Greenhaus & Simon,1976;Stumpf & Lockhart,1987)。柏木(2014)は、志

望職業を人生での目的として重視することを表すコーリング度という概念を取り上げ、これがキャリアへの自己効力感と関連することを見出している。

これらの概念とは反対に、就業に対する否定的な態度を検討した研究も行われている。古市(1995;2012)や古市・久尾(2007)は、職業に就くことを嫌い、避けようとすることを表す職業忌避傾向という概念を提唱し、この傾向が高い学生は、進路選択に関する自己効力感が低く、職業不安が高いことを示している。そして、小川(2017)は、職業忌避傾向とキャリア選択への積極性やストレス耐性との間に負の関係を見出している。また、浦上(1995)の職業不決断のモラトリウム尺度には、就職への拒否的態度が含まれており、若林・後藤・鹿内(1985)の職業レディネス、坂柳(1996)のキャリア・レディネス、浦上(2017)の職業アイデンティティには、逆転項目として、就業への拒否的、回避的な態度や無関心を表す項目が、矢野・羽田野・酒井・澤田(2006)では、看護学生を対象とした職業コミットメント尺度の逆転項目として、看護師になることへの拒否的態度がそれぞれ取り上げられている。

多方、就職に対するイメージの研究(杉本,2012)では、大学生の中に、職業に対して拘束的イメージを持ち、否定的な態度を持ちながらも、経済的な必要性や社会的な義務として就職するなど、就業に対して他律的な態度を持つ者がいることもわかっている。

以上の議論から、就業に対して肯定的な認知や感情、行動傾向を持つ学生は、キャリア選択に対して積極的に取り組み、キャリア決定への満足が高いだけでなく、入職後も、職務に対して高い動機づけを持ち、職場にも適応しやすいと考えられる。反対に、就業に対して否定的な認知や感情、行動傾向を持つ学生は、キャリア選択に対する取り組みが消極的で、キャリア決定への満足も低いと共に、入職後の職務に対する動機づけが低く、職場への不適応を生じやすいと予想される。

そこで本研究では、就業に対する態度の要因として、就業への関心の高さや重要性の認知、好意や意欲、職務上の達成への積極性や自発性など、就業に対する肯定的な認知、感情、行動傾向を表す「就業の重視と動機づけ」と、就業への拒否感や無気力、無関心や無意味感、職務上の達成への消極性や強制感など、否定的な認知、感情、行動傾向を表す「就業の拒否と無気力」を取り上げる。

就業に対する態度として本研究で取り上げるもう1つの要因が、就業において必要な行動に関する自己効力感である。先述のように、大学生を対象としたキャリア選択に関する自己効力感の研究はこれまで多く行われてきているが、彼らの就業自体に関する自己効力感についての研究は比較的少ない。

下村・木村・堀(1997)は、職業選択への自己効力感と仕事をこなすことに関する自己効力感を区別しており、大学で必要なライフタスクのスキルが高いほど、仕事をこなすことに関する自己効力感も高いことを明らかにした。児玉・松田・戸塚・深田(2003)は、職業アイデンティティの下位要因として職業への有能感を取り上げ、これが就職活動での情報収集と関連していることを、Hirshi, *et.al.*(2013)と Valero

& Hirschi(2016)は、就業に対する自己効力感がキャリア選択行動や見習い期間での就業への適合感とエンゲージメントを促すことを、それぞれ見出している。

この他、安達(2006)は、Holland(1985)の6領域の仕事活動に関する自己効力感の影響を取り上げ、過去の達成経験が仕事活動への自己効力感を高めていることを、Betz & Hackett(1981)は、性別の伝統的職業に対する自己効力感が男女それぞれの職業選択に影響することを示している。

このような研究知見から、大学生の就業に対する自己効力感の高さは、彼らのキャリア選択に肯定的な影響を与えるだけでなく、入職後の職務への動機づけや職場適応を促すと考えられる。

ただし、一般に企業や団体など組織内の業務で必要な行動には、職務の遂行や目標達成、問題解決など、個人の職務遂行に関連する行動と、職場のメンバーとの関係形成や協同のコミュニケーションなど、職場における対人関係に関する行動が含まれる(West,2012)。また若林ら(1983)は、職業能力の要因として、職務での挑戦・企画やリーダーシップに関する有能性と支援的コミュニケーションに関する協調性を、Rooney & Osipow(1992)は、職業における個人のタスクと対人タスクに対する自己効力感を取り上げており、Hirshi, *et.al.*(2013)と Valero & Hirschi(2016)でも、課題遂行と対人関係への自己効力感を取り上げている。

したがって、職務の遂行に関する自己効力感と対人関係に関する自己効力感は、就業生活において必要な異なる行動の側面として区別すべきであろう。加えて、長期にわたる就業生活への適応を考慮すれば、与えられた職務での達成だけでなく、職務能力の向上に対する自信のような将来の職業的達成に関する自己効力感も重要であろう。そこで本研究では、就業に対する自己効力感として、個人の課題遂行や問題解決、職務を通じた能力向上に関する効力期待を表す「職務遂行への自己効力感」と、職場における他者とのコミュニケーションと対人関係の形成、対人葛藤への対処に関する効力期待である「対人関係への自己効力感」の2つの要因を取り上げる。

それでは次に、大学生の「就業の重視と動機づけ」、「就の拒否と無気力」、「職務遂行への自己効力感」、「対人関係への自己効力感」の4つの就業態度を規定する要因について検討しよう。

## 2.学校生活における活動の傾向と経験

大学生は一般的に、アルバイトやインターンシップのような限られた期間と内容のものを除いて、就業経験を持っていない。その中でも、就業に対して価値を見出し、高い意欲や自信を持っている学生もいれば、就業を苦痛と考え、これに対して意欲や自信を持ってない学生もいる。彼らは、就業に対する態度をどのようにして形成していくのだろうか。

Erikson(1968)や下山(1986)によれば、大学生のような青年前期の若者は、日常生活で様々な課題や活動に取り組みながら、自己に適した職業など将来の方向を決定する。また Holland(1985)は、職業選択を行う時期までに、興味のある活動に取り組みながら、その活動領域に関する知識やスキルを身につけていく中で、特定の職業領域に対する選好を形成していくという。下山(1992)は、自己を信頼し主体的に興味あることを実行し成長していることを表すアイデンティティの確立が、何らかの活動に対する自己投入と肯定的意識、職業への否定的な態度や職業選択を回避する傾向と負の関係にあったことを示している。

一般に、大学生が学校生活で従事する活動としては、大学の講義や実習、自主的な学習など学業に関する活動、部やサークル、ボランティアなどの課外活動、そして、アルバイト、職場体験、インターンシップ、資格取得など職業に関連する活動が挙げられる(溝上,2009;山本・三保・寺田,2017;向居・佐藤,2012;川瀬,2016)。こうした活動への取り組みやそこでの経験が、大学生の心理的社会的な発達や能力の向上、キャリア意識の形成を促すことを示した研究は多くある。

まず、学業への取り組みに関する研究では、授業や授業外での学習に重点をおいた大学生活が、将来設計、問題解決力、コミュニケーション力などのスキルと関連すること(溝上,2009)、学業への意欲の高さが、進路意識の高さと関連すること(武蔵・河村,2016)、さらに、参加型授業の経験が、大学生活への充実感を高め、入職後の職務におけるプロアクティブ行動と関連すること(小川,2012)が示されている。また、職業に関する実習の効果に関して、飯島・賀沢・平井(2008)は、看護実習への参加が、進路選択への自己効力感と職業レディネスを高めたことを、矢崎・中村(2018)が、社会福祉実習後にコミュニケーション力が高まったことをそれぞれ明らかにしている。

一方、Frederick & Eccles(2008)や Bohnert,Aikins, & Edidin(2007)は、課外活動への参加が、自尊感情やレジリエンスの向上、社会的適応など心理的成長を促すとしており、秋元(2012)は、サークル活動への参加と問題解決力との関連を、登張・名尾・首藤・大山・木村(2016)は、サークル活動や委員会活動への参加と協力志向との関連を見出している。特に、運動部への参加に関する研究は多く見られ、運動部への参加は、未来の肯定、向社会的スキル(杉田,2013)、対人スキルや自尊心(平井・木内・中村・浦井,2012)、レジリエンス(友田・根岸,2016)、チームで働く力(関・溝上,2018)との関連がある。

またボランティア活動の効果に関する研究では、ボランティア活動への参加が、主体性や自己効力感(伊多波・首藤,2016)、仕事のマネジメント力(山本ら,2017)、コミュニケーション・スキルや生活の充実感(水野・加藤,2008)と関連することが示されている。

就業体験に関する研究では、清水・三保(2013)、酒井(2013)、山本ら(2017)が、アルバイト経験と忍耐力、コミュニケーション力、判断力などのライフスキルとの関

連を、関口(2010)が、多様性が高いアルバイトの経験と、就職活動への自己効力感、主体的なキャリア行動、職場メンバーとしての自己効力感との関連を明らかにしている。職場体験やインターンシップに関しても、小学校から高校までの職場体験と、問題対応力や人間関係形成力との関連(児玉,2019)、課題設定型のインターンシップへの参加と、主体性や課題発見力との関連(真鍋,2010)が示されており、崔(2019)の調査では、インターンシップ参加後に、参加学生の主体性と社会的スキルの得点が上昇していた。

このように、学校生活における様々な活動への参加は、課題遂行や対人関係に関する肯定的態度の形成だけでなく、キャリア選択や将来の就業生活に関する肯定的態度の形成をも促すことがわかる。それでは、なぜこれらの活動が、学生のこうした心理的社会的な成長をもたらすのだろうか。

一般に、ある活動への態度は、その活動に従事した結果、報酬を得られたかどうか、つまり行動と報酬の随伴経験によって規定されると考えられる。豊田(2006;2016)、豊田・濱邊・浦(2013)、牧・関口・山田・根津(2003)、牧・関口・根津(2006)は、学業に関する努力による達成や、友人への支援など向社会的行動に対する好意的反応といった随伴経験が、努力の肯定や自己実現的態度、自己効力感を強めることを、反対に、牧・関口・山田・根建(2003)と牧・関口・根建(2006)は、これらの形成における非随伴経験が抑うつや無気力感を高めることを明らかにしている。

また、学業・部活動などでの達成経験や、友人・教師からの好意的反応のように、課題への取り組みにおける努力と対人関係における支援に関する肯定的な随伴経験が多い学生は、それらの分野での自己効力感が高い傾向にある(三浦・大角,2016)。

こうして、特定の活動領域での経験を通して形成された態度は、類似した特徴を持つ他の活動領域に般化されると考えられる。例えば、渋谷・西田・佐々木・北村・磯貝(2018)は、スポーツの部活動で獲得されたスキルが日常生活の他の分野でのライフスキルへと般化していることを継時的な調査から明らかにしており、竹村・前原・小林(2007)は、運動部の活動参加によって、学業における課題志向および協力志向が高まることを示している。さらに下村・木村・堀(1997)では、学校生活での学業、アルバイト、サークル活動におけるライフタスクに対する自己効力感と、仕事をこなすことへの自己効力感に関連が見出されており、この結果は、学校生活における様々な活動を通して獲得されたライフタスクへの自信が、職業生活での課題遂行に対する自信へと般化されることを示唆している。

つまり、これまでの学校生活における活動や対人関係で、目標の達成や他者からの承認など、心理的社会的な報酬を得る経験をした学生は、就業生活における職務遂行や対人関係のような未経験の領域に対しても、意欲や自信が高くなるなど肯定的な態度の形成が促されると考えられる。それでは、学校生活における活動に対し

て、どのように取り組み、どのような経験をするのが、就業に対する態度の形成に影響を与えるのだろうか。

### (1) 活動へのコミットメントと達成の経験

Hackett(1995)は、過去の学業や職業に関連した達成経験が、職業への興味や自己効力感に影響するとしており、浅井(2014)は、達成経験とそれに基づく自己肯定感が職業への内発的動機づけを高めることを示している。佐藤(2017)は、部活動での優勝のような成功体験がアイデンティティの発達を促すことを、清水・古株・木田・川端・玉川(2015)は、看護実習での達成感が、看護学生の職業アイデンティティを向上させることを明らかにしている。

安達(2006)は、職業の特性に関連する過去の達成経験が、浦上(1995)、奥田・松寄・山口(2015)、川瀬(2016)は、過去の進学、学業やアルバイトにおける達成や成功、成果の実感が、それぞれ進路選択への自己効力感を高めることを見出している。さらに、学生時代の達成経験と就職活動での内々定獲得にも関連が示されている(辻川・神原,2020)。また、高田(2018)は、サークル活動の行事で得られた個人や集団による成果の達成が、集団における責任感やモチベーション向上などの成長と関連することを、一方、城(2010)は、否定的な経験があってもそれを克服した経験が、問題に対応する統制感や努力への肯定的期待と関連することを明らかにしている。

このように、学校生活での活動における目標達成や困難の克服、自己成長のような肯定的な経験が、職業やその選択、課題への取り組みや、集団による達成などに対する動機づけと自己効力感といった就業への肯定的な態度の形成を促すと考えられる。ただし、こうした活動で成果を挙げるためには、単に、その活動に参加するだけでなく、その活動において、意欲を持って積極的に取り組んだり、困難があってもそれを克服しようとするなど、活動に対する強い関与(池田・伏木田・山内,2019)やコミットメント(萩原・磯貝,2014a)が重要と考えられる。例えば、藤原・河村(2016)は、高校生の部活動に積極的に参加した生徒が、消極的な参加や不参加の生徒よりも、学業への意欲、対人関係、進路意識において適応していることを示している。そして向居(2013)は、様々な課外活動に熱心に取り組んでいた学生ほど、計画や実行の能力、他者に働きかける能力が高いことを、石井ら(2015)は、何らかの活動に打ち込み、目標のために努力するなど、コミットメントが高い学生ほど、職業未決定の傾向が低いことを見出している。

学業への取り組みに関する研究では、学業へのコミットメントや意欲、主体性の高さと、アイデンティティの形成や社会的スキルとの関連が示されている(宇都宮,2018;藤澤・原口,2019)。そして、木村・河井(2012)では、地域でのサービス・ラーニングへの積極的な関与が、チームワークや問題解決のスキルの向上を促していた。武蔵・河村(2016)、浦上(2015)、川瀬(2016)、小川(2017)、小杉・手島(2010)、藤澤・原口(2019)、古田(2018)の研究では、授業や予習復習など学業への意欲の高



さや主体的な取り組みと、キャリア選択に関する意識や自己効力感の高さ、目標の明確化や積極的行動など、キャリア選択への肯定的な態度と行動との関連が示されている。また、就業者を対象とした研究では(保田・溝上,2014)、入職前の学業への主体的学修と、入職後の組織社会化、能力向上、革新行動に関連が見られている。

一方、Barber,Eccles, & Stone(2001)は、課外活動への自発的な関与がアイデンティティ探求と自己理解を促す場となっているとしており、小杉(2007)は、就職活動での内定獲得者の特徴として、大学の成績が良いだけでなく、クラブやサークル活動、アルバイトやインターンシップに熱心であることを見出している。池田・伏木田・山内(2018)や古田(2012;2018)は、部やサークル活動など課外活動への関与が高い学生ほど、キャリアレジリエンスやキャリアへの自信も高いことを、溝上(2009)は、将来のために積極的行動をとり、クラブやサークル活動に重点をおいた大学生活を過ごした学生において、将来設計、問題解決力、コミュニケーション力などのスキルが高いことを示している。また、学校行事へ傾倒した学生は、学校行事への更なる傾倒や問題解決への積極性が高く(河本,2014)、学外での様々な活動への積極的な取り組みや地域活動への真剣な取り組みは、進路選択への自己効力感と関連していた(辻川・神原,2020;川瀬,2016)。

大学生の就業に関連した活動の研究では、古田(2012)が、アルバイトへの注力の高さとキャリアへの自信との関連を、向居・佐藤(2012)と川瀬(2016)は、資格取得への熱心さや真剣な取り組みと、課題発見力、実行力などの社会人基礎力や進路選択への自己効力感との関連をそれぞれ明らかにしている。先述した通り、企業が新規採用時に重視する能力としても、意欲や積極性、主体性や目的意識など就業への肯定的な態度が挙げられており、就業生活においても、職務に対して意欲を持ち積極的に取り組むことは、職務において優れた成果を挙げ、職業生活に適応していくために重要な態度といえる(尾形,2016)。

以上のことから、学校生活において活動に意欲をもって積極的に取り組み、困難を克服しながら、目標を達成するなどの成果を経験できた者は、就業生活においても、同様の肯定的な態度をもって職務に取り組むことで、優れた成果を得られるなどの期待を持つことができるだろう。したがって、こうした傾向・経験を持つ学生ほど、「就業の重視と動機づけ」や「職務遂行への自己効力感」が高いのに対し、「就業の拒否と無気力」は低いと予想される。学校生活における多くの活動では、様々な他者と交流し関係を築く機会もあるため、「対人関係への自己効力感」を高めるかもしれない。

## (2) 集団活動における協同と成果の経験

就業者が働く企業や公官庁などの組織では、通常、職場の集団ないしチームによって業務が行われており、彼らは、チーム・メンバーとコミュニケーションを図り

ながら協力している(West,2012;縄田・山口・羽多野・青島,2015)。企業の新規採用においても、チームで働く能力やコミュニケーション能力は最も重視されている能力の1つである(青谷・三宅,2005;小杉,2007)。

学校生活における部やサークル、ボランティアやアルバイトなどの活動においても、チーム・メンバーとコミュニケーションを図りながら協同する機会は多くあり、正課においても、学生同士や社会人との交流や協同があるような実習では、こうした集団経験をすることができる。

学業における集団経験に関する研究では、長濱・安永(2010)が、一般の講義参加者よりも対話中心の講義参加者において、協同への肯定的な態度が高まっていたことを示しており、木村・河井(2012)は、地域でのサービス・ラーニングへの積極的な関与が、チームワークの能力と関連していたことを、矢崎・中村(2018)は、社会福祉実習後にコミュニケーション力が高まったことを明らかにしている。また河本(2014)では、学校行事への傾倒と、集団による協力や達成に対する肯定的感情との関連が見出されている。

多方、課外活動に関する研究では、溝上(2009)が、クラブやサークル活動に重点をおいた大学生活によって、コミュニケーション力が高まる傾向を示しており、部やサークルなどの集団活動に傾倒し、メンバーと主張し受容し合う関係を築いた学生ほど、アイデンティティを確立しており、社会スキルも高いことも見出されている(宮下・大野,1997;堀岡,2010)。また運動部への参加は、社会的スキルの高さに関連があり(杉田,2013;平井ら,2012)、特に集団スポーツの部活動所属者で、課題遂行と対人関係に関するライフスキルが高い傾向にある(平井ら,2012)。さらに池田・伏木田・山内(2018)は、クラブやサークルの活動で議論を積極的に行うなどの協同経験をした学生ほど、キャリアレジリエンスが高いことを示しており、チームで働く力が高い学生ほど、進路選択への自己効力感が高いことも見出されている(田島・岩瀧・山崎,2016)。

就業体験に関する活動の研究では、山本・三保・寺田(2017)が、アルバイト経験とコミュニケーション力との関連を見出しており、崔(2019)は、インターンシップ参加後に学生の社会的スキルが上昇していたことを明らかにしている。また、木村(2014)による就業者を対象とした調査では、学校生活における部活動やアルバイトで身についた能力として、チームで働く力が最も多く挙げられている。そして関・溝上(2018)と竹村・前原・小林(2007)では、運動部への参加とチームで働く力および協力志向との関連が、登張ら(2016)および米田・川端・伊丹・清水(2015)では、サークル活動や委員会活動、ボランティア活動への参加が、協力への肯定的な態度と関連することも示されている。

このように、他の学生や社会人との交流と協同がある実習授業、部やサークル、アルバイトやボランティアなどの課外活動では、メンバーとの協同によって課題を達成したり、助け合い認め合う中でチームへの所属感を持つといった肯定的な集団

経験を得やすいだろう。その中で、学生たちは、集団による協同に対して肯定的な態度を形成し、その中で必要となる社会的スキルも獲得していくと思われる。その結果、彼らは、集団メンバーとの協同を通して課題を遂行していくと考えられる就業に対しても、意欲や自信など肯定的な態度を持つようになると予想される。したがって、学校生活において、こうした集団活動の経験をした学生ほど「就業の重視と動機づけ」が高いと共に、「職務遂行への自己効力感」や「対人関係への自己効力感」も高いのに対し、「就業の拒否と無気力」は低いと考えられる。

### (3) 集団活動におけるリーダーシップの経験

上記のような集団活動において重要な役割を果たすのがリーダーである。企業などの組織においても、一定の職務経験を持つ者は通常、役職を与えられてリーダーシップをとることを求められる。リーダーシップは、職業上のコンピテンシーとしても挙げられており(West,2012;Spencer & Spencer,1993)、企業の採用においても重視される能力の1つである(小杉,2007)。

島本・石井(2006)と甘潟・森口・小山田・齋藤・城(2009)は、リーダーシップの能力が高い学生ほど意欲も高く、目標志向や協同への肯定的な態度を持つ一方、抑うつ傾向は低いことを示している。就業者を対象とした研究では、大学4年次でのリーダーシップ自己効力感が高いほど、入職1年後のそれが高い傾向にあった(武田・溝口・溝上,2022)。ただしリーダーの役割は、多くの学生が経験するわけではないため、大学生のリーダーシップに対する自信は、努力による達成や対人関係の形成に対する自信と比べて、全体として低い傾向にある(藤木・竹田,2005)。

リーダーシップ能力の高い学生は、リーダーの役割を任せられ、異質性の高いメンバーをまとめながら、困難や失敗を経て目標を達成するといった経験をしていることが明らかにされており(泉谷・安野,2016)、河本(2014)は、学校行事において、メンバーに指示やアドバイスを与え、彼らを動機づけながら、目標を達成するというリーダーシップ経験が、他者統率の熟達や問題解決への積極性、集団による協同への肯定的感情などの効果をもたらすことを見出している。また、サークルのリーダー経験者が未経験者と比較して、協調的な問題解決のスキルが高いという知見もある(登張ら,2016)。

このように、学校生活における部やサークル、学校行事などの集団活動でリーダーの役割を与えられ、リーダーシップを発揮して成果を得る経験をした者は、集団の中でメンバーと協同しながら課題に取り組むことに対して、意欲や自信を持つようになると考えられる。そして、これらと同様の経験をする機会があると予想される就業生活における職務遂行や対人関係に対しても肯定的な態度を持つだろう。したがって、学校生活においてリーダーシップを発揮して成果を経験した学生ほど、「就業の重視と動機づけ」が高いと共に、「職務遂行への自己効力感」や「対人関係

への自己効力感」も高いのに対し、「就業の拒否と無気力」は低いと予想される。

#### (4) 目標や挑戦のない無為な生活

上記のように、学校生活において、何らかの活動に意欲を持って積極的に取り組んだり、団体のメンバーとコミュニケーションを図りながら協同する経験をしてきた学生がいる一方で、こうした活動に全く参加することなく、学校生活を無為に過ごす者もいる。就業者を対象とした調査では、大学生生活を否定的に評価した者の約半数が、「だらだらと過ごした」「目的意識がなかった」という回答をしていた(河井,2014)。

溝上(2009)は、クラスター分析によって、授業や授業外の学修、クラブ・サークル、友人との交流などの活動を全般的に行っていない活動性の低い学生の存在を明らかにしており、こうした学生は、上述のような活動性の高い学生と比べて、学生生活への充実感、授業や授業外の知識・技能の習得、関係性や課題遂行の能力ともに低く、明確な将来設計がない傾向にあった。また、竹村ら(2007)は、部活動に所属していない学生において課題志向性や協同性が低い一方、自己不明瞭感が高いことを、平井ら(2012)や杉田(2013)は、運動部での活動経験がない学生で、計画性や社会的スキルが低いことを見出している。また、アルバイトやインターンシップ、ボランティアの未経験者は、これらの経験者と比べて、コミュニケーション能力や仕事のマネジメント能力、レジリエンスが低い(寺田・山本・清水,2017;山本ら,2017;友田・根岸,2016)。

このような学生は、関心のある活動に参加して積極的に取り組んだり、他者と協同する中で目標達成や能力向上などの成果を得る経験に乏しいため、こうした活動に対して肯定的な態度を持ちにくく、課題遂行や対人関係に対する自信を獲得することも難しいだろう。その結果、職務の遂行やそこでの目標達成に積極的に取り組むことが必要と考えられる就業に対しても、意欲と自信を持つことができないと考えられる。したがって、学生生活において、何かの活動に参加したり目標を持って挑戦することなく無為に過ごした学生は、「就業の重視と動機づけ」も「職務遂行への自己効力感」も低いのに対し、「就業の拒否と無気力」は高いだろう。また、学校生活における多くの活動では、他者と交流し関係を築く機会も存在するが、こうした活動に従事していなかった学生は、このような機会に乏しいため、「対人関係への自己効力感」も低いかもしれない。

#### (5) 正課に対する努力と課外活動への消極的態度

上記のような学生とは別に、卒業に必要な科目や、そこで与えられた課題など、大学の正課である学業に対しては真面目に取り組むが、正課外の学習やサークルなどの課外活動に自発的に参加することがない学生もいる。彼らは、正課以外の活動に消極的であるものの、正課をこなすために必要な努力はしていることから、学校

生活全般において無気力な態度を持つ先述のような学生とは異なる特徴を持っているといえる。畑野・溝上(2013)は、クラスター分析によって、単位や卒業のために授業内の学習は十分行っているが、授業外の学習時間は少なく、自己成長のために学業に取り組む主体的な授業態度に乏しい学生が存在することを見出しており、彼らは、学業全般に無気力な傾向の学生とは異なると推察されるが、この研究では、課外活動に対する態度との関連が検討されていない。

学業や課外活動に対して積極的に取り組まない学生が、就業に対して肯定的な態度を持ちにくいことは、保田・溝上(2014)、藤澤・原口(2019)、川瀬(2016)など多くの研究で示されてきた。しかし、正課や課外活動を含め学校生活全般に対して無気力な学生と、上記のように課外活動には消極的であるものの、正課に対しては真面目に取り組んでいる学生で、就業に対する態度にどのような違いがあるのかを検討した研究は見られない。

このような学生は、与えられた課題を遂行することについては、ある程度の意欲と自信を持っているかもしれないが、課外活動への積極的な参加や、こうした活動にしばしば見られる集団での協同作業、学校の同級生を超えた様々な人との交流に対する意欲と自信は低いと考えられる。彼らは、就業に対して必ずしも拒否的ではなく、与えられた職務には真面目に取り組むことはでき、職場のメンバーと必要なコミュニケーションをとれると推察される一方で、就業生活において、高い目標を持ち、優れた成果を挙げるために努力したり、職場のメンバーと積極的に関わりながら協同することへの意欲と自信は高くないかもしれない。したがって、正課に対しては努力しているものの、課外活動には消極的な学生が、「就業の重視と動機づけ」、「就業の拒否と無気力」、「職務遂行への自己効力感」や「対人関係への自己効力感」をどの程度持っているのかについては、探索的に検討する。

### 3.学校生活における対人関係の傾向と経験

先述のように、就業生活では一般的に、職場のメンバーとコミュニケーションを図りながら協力していくことが求められる。仕事においてコミュニケーション能力が必要だと考える割合は、採用時の段階で約 75%にのぼり、入職後3年以内では、9割近くに増大する(岡崎公共職業安定所,1994)。またコミュニケーション能力は、企業が採用時に重視する能力としても最も多く挙げられている(厚生労働省,2004)。実際に、社会的スキルが高い就業者ほど、職務への関与も職業での自己実現の実感も高く(児玉,2015)、積極的な問題解決を図ることができると同時に、心理的ストレスも低い(田中,2009)。ただし、職務遂行に必要なコミュニケーションとは、多様なメンバーとの情報の伝達や理解、意思疎通や合意形成、主張や交渉などを含み、友人関係における社会的スキルを土台としつつも、より高度なスキルが求められるものである(小杉,2007;渡部,2018;Bazerman & Neale,1997;Hayes,2002)。

大学生の対人関係に関する研究では、自己表明のような対人積極性が高い人ほど、生活全般で意欲的に活動しており(平石,1993)、意図の伝達や理解などのコミュニケーションへの自信が高いほど、社会における自己確信を表す心理社会的同一性が高いことが示されている(畑野,2010)。そして、良好な友人関係を築いている学生ほど、集団活動に困難を感じない傾向にある(八木,2016)。

また、楠奥(2009)は、積極的コミュニケーション傾向や対人葛藤対処を含む社会的スキルが高い人ほど、進路選択の自己効力感が高いことを、上野(2014)や望月(2009)は、対人スキルが高く、交友活動を多く持っている学生ほど、進路成熟性が高いことを、岡田・榎本・下村・山浦(2016)は、自己主張や傾聴などのコミュニケーション能力が高いほど、構想力や未来への信頼などキャリア形成力が高いことをそれぞれ示している。そして、小杉(2007)は、内定獲得者の特徴として、友人との付き合いに熱心であることを見出している。さらに、大学生活での友人関係への自己効力感が高い学生ほど、仕事への自己効力感も高いことから(下村ら,1997)、大学時代に良好な友人関係を築けた学生は、就業生活において、対人関係だけでなく職務の遂行に対しても自信を持つことができるといえる。

就業者を対象とした調査では、大学時代に豊かな人間関係形成に重点をおいていた就業者ほど、入職後に組織社会化ができていたり(館野,2014)、課外活動での対人的交流やそれによる大学生活への充実感が、入職後の組織社会化や能力向上、革新行動やプロアクティブ行動と関連していることが明らかにされている(保田・溝上,2014;小川,2012)。

このように、対人的交流に積極的な態度を持ち、コミュニケーション能力が高く、良好な対人関係を築いている学生は、就業に対する肯定的な態度を持つことができ、入職後の就業生活に対しても適応しやすいと考えられる。ただし、学校生活で経験する対人的交流の相手やコミュニケーションの取り方にも様々なものがある。そこで次に、学校生活で経験する対人的交流とコミュニケーションにはどのようなものがあるか、そして、その経験が就業に対する態度にどの程度影響を与えるのかについて検討しよう。

### (1) 多様な他者との積極的な交流とその成果

大学生が学校生活で交流している人々は、高校時代や大学の友人、部やサークル活動のメンバーのように、多くの場合は、同世代で関心領域や価値観などが類似している同質的な人々であるのに対して、就業生活で関わる人々は、年齢や立場、価値観などが異なる多様な特徴を持っている(館野,2014)。就業生活では、こうした多様な人々とコミュニケーションを図りながら協力していく必要がある。

保阪・岡村(1986)や落合・佐藤(1996)によれば、青年期の友人集団は、お互いの共通点を確認し合う同質性の高い集団から、お互いの違いを理解し自立した個人として尊重しあう集団へ移行するという発達的な変化が見られる。しかし、榎本

(1999)や高坂(2010)では、大学生においても友人との類似性を重視し仲間以外の異質な他者を拒否する傾向がみられ、異質な他者を拒否する学生ほど、友人関係への満足が低いことも示されている。

また、大学生の苦手な対人場面として、目上の人や後輩、あまり親しくない人との関わりが挙げられており(後藤・大坊,2003)、意見が合わない友人と話し合うことに否定的な態度を持つ20代の若者も6割以上いるなど(福重,2016)、多様な人々とのコミュニケーションが苦手な若者は多く存在することが伺える。特に、自尊感情や開放性が低い学生は、異なる考えを持つ人との交流や異なる価値観を学ぶことに否定的な傾向が示されている(飯田・青山・堀口・藤原・大川・杉本・遠藤,2020)。こうした学生は、多様な人々との交流やコミュニケーションにおいて困難を抱えやすいことが推察される。

これに対し、多様な他者との関わりを経験した人ほど、多様な他者への受容性が高いこと(松本,2022)、個人を尊重し異質性を認める友人集団を経験した学生は、協調スキルが高いこと(大山・登張・名尾・首藤・木村,2013)が示されており、異なる他者への共感性が高い人は、コミュニケーション能力やチーム志向、リーダーシップ能力を含むチームワーク能力が高い傾向にある(杉森・古屋・相川・土井・曹蓮,2013)。また池田ら(2018)は、他大学や社会人との関わりを持っている学生ほどキャリアレジリエンスが高いことを、辻川・神原(2020)は、様々な人に出会う、人脈を広げる、学外の活動に取り組むなどの傾向を含むキャリア・アクションが進路選択への自己効力感を高め、内々定獲得を促すことを明らかにしている。就業者を対象とした研究では、大学時代に学外組織での活動経験を持っていた人ほど、仕事における課題解決力が高いことも示されている(清水・三保,2013)。

このように、学校生活において身近な友人の範囲を超えて、年齢や立場、価値観が異なる多様な人々と積極的に交流し、その中で成長を実感した学生ほど、こうした他者と関係を築くことについて自信を持つことができるため、就業生活において多様な人々と意思疎通を図って関係を築いたり、協力していくことにも自信を持つようになると考えられる。したがって、こうした学生ほど就業における「対人関係への自己効力感」が高く、これに伴って、「就業の重視と動機づけ」、「職務遂行への自己効力感」も高い一方、「就業の拒否と無気力」は低い傾向があると予想される。

## (2) 友人への自己開示と社会的サポートの提供

すでに述べた通り、就業生活では、学生時代の友人関係とは異なった多様な人々とのコミュニケーションを図り、良好な関係を築くことが必要である。ただし、青年期に親密な友人関係を築くこと自体は、就業生活への適応の前提となるアイデンティティ形成に重要な役割を果たしている(Erikson,1968;杉村,1998;堀岡,2010;松下・吉田,2010)。親密な友人関係を持つ学生は、コミュニケーション能力が高い(松

永・岩元,2008)、社会的活動障害の傾向が低い(姜・松田,2020)、自己や周囲の人への信頼感が高い(石本・久川・齊藤・上長・則定・日潟・森口,2009)など、対人関係の面で適応的な特徴がある。加えて、こうした学生は課題解決能力が高く、生活全般での意欲や向上心といった自己実現傾向も高い(松永・岩元,2008;石本ら,2009)、将来展望が肯定的であるなど(山田・岡本,2008)、課題遂行の面でも適応的な特徴がある。

したがって、学校生活での親密な友人関係の経験を通して身についた対人関係への肯定的な態度や社会的スキルは、就業生活の中で求められる、より高度なコミュニケーションや対人関係の形成に関する態度やスキルを獲得していくための土台として重要だと考えるべきであろう。親密な関係の形成を促進する対人行動として様々な研究で挙げられているものとしては、自己開示と社会的サポートがあり(Buhmester,Huhman,Witterberg, & Reis,1988;丹野,2009)、これらの行動は、親密な友人関係に見られる特徴であることも示されている(丹野・松井,2006)。

友人関係において自己開示をしている人は、対人スキルが高く、友人への信頼感を持ち、孤独感が低いなど対人関係の面で適応的な傾向にある(島本・石井,2006;田中・下田,2013;竹内,2011)。さらに、こうした人は、自己の価値を肯定し自己本来感を持ち(原澤,2017;田中・下田,2013)、意欲が高い(島本・石井,2006;浦辺,2013;田中・下田,2013)、友人からの社会的サポートを引き出してストレス低下を促すなど(福岡,2007)、様々な面でも適応的な傾向を持っている。

一方、社会的サポートの提供や援助行動が多い人も、関係の開始や維持などに関する社会的スキルが高く(堀,2009)、共感的で社会的外向性が高いなど、対人関係の面で適応的であると共に(山際・堀,1991)、自尊感情が高く、努力や達成志向が高い反面(山本・堀・大塚,2008;山際・堀,1991)、無気力傾向は低いなど(渡辺,2014)、やはり多様な面で適応的な傾向を持っている。また周囲の人へのサポート提供は、互恵的なサポート関係を築く結果(森本,2007;周・深田,1996)、ストレスの低下や主観的幸福感を促す(谷口・浦,2003;森本,2007)。さらに萩原・磯貝(2014b)では、スポーツ・チーム内の互恵的なサポート授受が、無力感の低下やチームへの適応を促すことも見出されている。

しかし、岡田(1995)や松永・岩元(2008)によれば、現代の青年の中には、友人関係においても、お互いに傷つけ合わないようによく関わらない傾向を持つ人もいる。こうした人は、自己開示をあまりせず(岡田・榎本・木村・山浦,2021)、協同への肯定的な態度をあまり持っていない(岡田,1999;岡村,2019)。友人に本音を開示しないなど心理的距離をとる関係回避傾向の高い人も、自己主張をしにくく、協同への肯定的な態度を持ちにくいと共に(岡田,2007;岡村,2019;登張ら,2016)、自己実現傾向や、社会における自己確信を表す心理社会的同一性が低く、将来の展望が不明瞭であるなど(石本ら,2009;川本,2015;山田・岡本,2008)、心理的社会的に不適応な傾向がある。また、表面的な友人関係を持つ人の中には、他者への配慮が低く、自己中心的な傾



向の人も含まれているが、これらの人々も、コミュニケーション能力や課題解決能力が低く、心理社会的同一性が低いといった同様の問題傾向を持っている(松永・岩元,2008;岡田,2011;堀岡,2010)。

就業者を対象とした研究においても(宮田,2007;片山・水野,2017)、仕事に関する自己開示は、職務への満足や職場への適応を促すことが示されており、職場メンバーへの社会的サポートの提供も、メンバーからのサポートを引き出し、このような互恵の関係が職業ストレスを低減することがわかっている(片受,2000;堀田・大塚,2014)。

学生時代の友人関係で本来の自己を開示し、サポートを提供していた学生は、就業生活においても、職場メンバーに対してこれらの対人行動をとりながら互恵的な関係を築けると予期し、就業生活での対人関係に対しても自己効力感を持つ可能性はある。しかし先述のように、こうした学生が、年齢や立場、価値観などが異なる多様な人々との関係形成や協同作業に対して、必ずしも意欲や自信を持てるとは限らない。したがって、学校生活において友人に自己開示や社会的サポートを行い、その関係の中で自己本来感を持つことができた大学生が、就業における「対人関係への自己効力感」を高めているのか、それに伴って、彼らの「就業の重視と動機づけ」や「就業の拒否と無力感」、「職務遂行への自己効力感」も影響を受けるのかについては、探索的に検討する。

### (3) 固定した閉鎖的な友人関係の形成

以上のように、親密な友人関係を築いてきた学生は、心理的社会的に適応している傾向がある。しかし、青年期の友人集団では、親しい友人と一緒に行動する一方、他の人との交流を避けるといったように、特定の友人と固定した閉鎖的な関係を形成する場合もあることが指摘されている(落合・佐藤,1996;三島,2013;松本,2022;石田・小島,2009)。岡田・榎本・下村・山浦(2016)は、大学内の人々と交流するものの、学外の人々との交流に乏しい大学生が比較的多く、彼らが自己閉鎖的傾向を持つことを見出している。

上記のような友人関係を持つ人は、友人関係への満足は高いものの、学習態度が低いという知見もある(三島,2013;三島・榎本,2009)。また児童を対象とした研究ではあるが、黒川・吉田(2007)と黒川(2006)は、仲間以外の人と関わらない子どもほど、対人スキルが低く、本音で話さないなど自己防衛的な対人態度を持ち、学級の友人への適応度も低いことを明らかにしている。こうした友人関係を形成する心理として、拒否されることや異質視されることへの不安(永井・石田,2020;高坂,2010;山田,2019)があると考えられる。異質視への不安が高い人は、友人関係への満足が低く、生活全般における意欲や充実感が低いなど、不適応な傾向がみられている(高坂,2010;山田,2019)。

杉本(2008)は、閉鎖的で同調的な友人関係を持つ大学生ほど、就職に拘束的なイメージを持っていることを示しているものの、固定した閉鎖的な友人関係を築いていた学生が、就業に対してどのような態度を持っているかについては、ほとんど研究がなされていない。しかし、このような学生は、立場や考えの異なる様々な人々とコミュニケーションを図りながら協同することに対して不安を持ちやすく、その結果、就業における対人関係については、就業自体に対しても否定的な態度を持つ可能性があるだろう。したがって、固定した閉鎖的な友人関係を築いていた学生ほど、就業生活における「対人関係への自己効力感」が低く、また「就業の重視と動機づけ」や「職務遂行への自己効力感」も低いのに対し、「就業の拒否と無気力」は高いことが予想される。

#### (4) 他者との交流の回避と単独行動の選好

学生の中には、多様な人々との交流に消極的なだけでなく、類似性の高い学生同士を含めて、他者との交流自体を回避し、1人で行動することを好む者もいる。こうした対人態度は、シャイネスの行動面として研究されている(菅原,1998)。対人関係に消極的で他者との交流を回避する傾向の学生は、被受容感が低く(徳永・稲畑・原田・境,2013)、対人不安や評価懸念が高いという特徴が見出されており(菅原,1998;岡田,2007;山田・岡本,2008;相川,1991)、他者からの拒否や否定的評価を避けるために、他者との交流を避け、単独行動を好むのだと考えられる。

このような傾向を持つ人は、関係開始や主張といった社会的スキルだけでなく、他者理解のスキルも低いことや、自己開示や社会的サポートの提供も少ないことが示されている(松島・塩見,2000;石田,1998)。さらに、共行動や相互理解を深めるようなコミュニケーションも少なく、親密な関係を築きにくい結果、孤独感を感じやすいといったように、社会的に不適応な傾向があると同時に(石田,2003)、特性自己効力感や自尊感情も低いなど自己への態度も否定的であることが示されている(應戸・中島,2015)。

また、岡村(2019)、平石(1993)、松下・吉田(2010)によれば、自己閉鎖的で対人関係を回避する傾向の人は、協同への肯定的な態度や自己実現の態度、自己同一性の確立度がいずれも低い。そして、友人形成やグループ活動が苦手な孤立しているなど、友人関係に困難を感じる男子学生は、被信頼・受容感が低く、大学の正課に対する不適合感を持っている(八木,2016)。さらに、樽木・川田・榊原・福田・大日向・馬場(2013)では、集団活動や友人を得る機会が見つけれないと回答した学生ほど、社会における自己確信を表す心理社会的同一性が低い傾向にあった。

このように、学校生活において他者との交流を回避し、単独行動をとるなど対人関係に消極的な態度を持つ学生は、多様な人々とコミュニケーションを図ながら協同することが求められる就業生活での対人関係に対しても意欲や自信が持てず、その結果、就業自体にも否定的な態度を持ちやすいと考えられる。したがって、こう

した学生ほど、就業における「対人関係への自己効力感」が低く、「就業の重視と動機づけ」や「職務遂行への自己効力感」も低いのに対し、「就業の拒否と無気力」は高いと考えられる。

以上の検討から本研究では、大学生の就業に対する態度に影響を与える要因として、「活動へのコミットメントと達成」、「集団における協同と成果」、「集団におけるリーダーシップ」、「正課への努力と課外活動の消極性」、「目標や挑戦のない無為な生活」という、学校生活における活動の傾向・経験に関する5つの要因と、「多様な他者との積極的交流」、「友人への自己開示とサポート提供」、「固定した閉鎖的友人関係」、「対人交流の回避と単独行動」という、学校生活における対人関係の傾向・経験に関する4つの要因を取り上げ、合わせて9つの要因が、「就業の重視と動機づけ」、「就業の拒否と無気力」、「職務遂行への自己効力感」、「対人関係への自己効力感」という就業に対する4つの態度にどのような影響を与えるのかを検討する。

## 2. 方法

### 1. 調査対象

大学3年生に対して、2018年、2019年、2020年のそれぞれ6・7月と10・11月に、質問紙調査を実施した。そして、本研究に用いた質問項目に対して欠損値のない146名を対象として分析を行った。回答者の年齢は20歳～24歳で平均20.7歳、男性58名(39.7%)、女性88名(60.3%)である。なお本調査は、著者が所属する大学の倫理審査委員会による承認を得て行われた。

### 2. 調査項目と回答方法

学校生活で力を入れた活動について、1)講義、2)ゼミ・実習、3)職業向けの講座・資格取得、4)アルバイト、5)学内の部・サークル(運動系)、6)学内の部・サークル(文化系)、7)学外の活動(運動系)、8)学外の活動(文化系)、9)その他という9つの選択肢から、複数回答ありで回答を求めた。

そして、学校生活における活動と経験に関しては、池田ら(2018)、浅井(2014)、河本(2014)、島本・石井(2006)、畑野・溝上(2013)、大野・宮下(1997)、長濱・安永・関田・甲原(2009)を参考に、対人関係に関しては、高坂(2010)、松本(2018)、佐藤(1995)、黒川・吉田(2007)、堀岡(2010)、落合・佐藤(1996)、福岡(2015)を参考に質問項目を独自に作成した。就業に対する態度に関しては、Greenhaus & Simon(1976)、若林ら(1983)、古市(1995;2007;2012)、松本(1993)、坂柳(1996)、下村ら(1997)、Varelo & Hirshi(2016)、杉本(2008;2012)、鹿内(2008)を参考に作成した。いずれの項目も、「1.まったく当てはまらない～6.かなり当てはまる」までの6段階で回答を求めた。

なお、学校生活における活動および対人関係の傾向・経験について考慮する時期は、高校時代から現在までとした。本論文で取り上げたこれまでの研究知見から、就業に対する態度の形成には、大学時代の活動経験や対人関係だけでなく、高校時代のそれらも影響していると考えられたからである。

### 3. 結 果

#### 1. 学校生活における活動と経験および対人関係

まず、学校生活で力を入れた活動として多く挙げられたのは、学内の部・サークルの 53.4%(運動系 27.4%、文科系 21.9%、両方 4.1%)、アルバイトの 45.9%、学業の 34.9%(講義 17.1%、ゼミ・実習 7.5%、両方 10.3%)である。この他、学外の活動が 24.7%(運動系 5.5%、文化系 18.5%、両方 0.7%)、ボランティアが 12.3%、職業向けの講座・資格取得が 8.2%、その他 1.4%であった。力を入れた活動が1つであった人は 42.5%と最も多く、2つ挙げた人が 25.3%、3つ挙げた人が 19.9%、4～5つ挙げた人が合わせて 4.8%、1つも挙げなかった人は 7.5%であった。

学校生活における活動と対人関係の傾向・経験に関する項目の回答について、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行ったところ、8因子が抽出された。分析に用いた項目と因子分析の結果を表1に、因子間の相関係数を表2に示す。

第1因子には、関心ある活動への熱中、目標のための努力と達成、それに伴う能力向上のような自己成長を表す項目の負荷量が高く、目標や挑戦のない無為な過ごし方がマイナスの負荷を示していたため、第1因子を「活動へのコミットメントと達成」と命名した。第2因子には、リーダーとしての積極的な役割遂行、それに伴う成果や自己成長を表す項目の負荷量が高く、第2因子を「集団におけるリーダーシップ」と命名した。第3因子には、多様な属性や意見を持つ人々との積極的な交流、それによる他者理解などの自己成長を表す項目の負荷量が高く、第3因子を「多様な他者との積極的交流」と命名した。第4因子には、正課である学業に対する受動的だが堅実な取り組みと、課外活動のような自発的活動への消極的な態度とを表す項目の負荷量が高く、第4因子を「正課への努力と課外活動の消極性」と命名した。第5因子には、他者との関わりを回避し1人で行動するなど、対人的交流への否定的な態度を表す項目の負荷量が高く、第5因子を「対人交流の回避と単独行動」と命名した。第6因子には、友人に対する悩みや将来など内面的な自己開示と、友人関係において自分らしくいられるという自己本来感を表す項目の負荷量が高く、第6因子を「友人への自己開示と本来感」と命名した。第7因子には、特定の親しい友人との固定した閉鎖的な対人的交流を行う傾向を表す項目の負荷量が高く、第7因子を「固定した閉鎖的友人関係」と命名した。第8因子には、集団活動での協同による成果や一体感の経験と、友人への物理的・情緒的なサポートの提供を表す項目の負荷量が高く、第8因子を「集団での協同とサポート提供」と命名した。

学校生活における活動および対人関係の傾向と経験が  
大学生の就業に対する動機づけと自己効力感に与える影響

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
A08 学業や他の活動を含めて、夢中になって取り組んだものはなかった。	-0.86	0.09	0.11	-0.01	0.02	-0.04	0.22	0.04
A03 熱心に取り組んだ活動を通して能力を磨き、自信を持つことができた。	0.85	0.12	0.07	0.00	-0.01	-0.03	0.09	-0.08
A05 目標を持ってがんばったことはあまりなく、何となく学校生活を送ってきた。	-0.83	-0.05	0.13	-0.04	0.04	-0.11	0.27	0.07
A02 関心のあることに夢中になって打ち込み、充実感を得ることができた。	0.82	-0.09	0.14	-0.10	0.01	0.11	0.19	-0.09
A06 大きな努力が必要なことには挑戦せず、無為に時間を過ごした。	-0.75	0.01	0.15	-0.01	0.13	-0.04	0.34	0.00
A01 自分が決めた目標に向かって努力を続け、それを達成した経験がある。	0.74	0.08	-0.10	0.15	0.05	0.05	-0.06	0.06
A07 特に打ち込んだ活動はなく、遊んで過ごすことが多かった。	-0.62	-0.07	0.19	-0.06	0.10	-0.04	0.41	-0.13
A04 自分がやっていた活動で困難を乗り越え、精神的にも成長した。	0.60	0.20	0.12	0.10	-0.15	-0.09	0.12	0.01
A10 リーダーになり、目標に向けてメンバーのやる気を引き出すことができた。	0.07	0.89	0.06	-0.10	-0.02	-0.05	0.03	-0.03
A11 学校で多くの人をまとめる役割を任せられ、積極的に責任を果たした。	-0.03	0.86	-0.02	-0.05	0.10	-0.06	-0.01	0.04
A12 クラスや部活動などのリーダーとして働き、自分も成長できたと思う。	0.03	0.85	-0.02	-0.04	-0.02	-0.03	0.09	0.07
A09 自ら率先してグループの人たちを引っ張り、成果を挙げた経験がある。	0.13	0.78	0.13	-0.08	0.10	0.02	0.09	-0.03
A23 自分が知らない知識や経験を持つ人々と出会い、色々な刺激を受けた。	0.02	0.14	0.78	0.17	0.01	0.13	0.01	-0.08
A22 考え方や関心の異なる人とも、積極的に話して理解するようになってきた。	-0.16	-0.02	0.78	0.12	0.05	0.17	-0.19	0.20
A21 友人以外の様々な人と自分から知り合う機会を作り、交流を広げた。	-0.18	-0.01	0.76	0.06	-0.09	-0.03	-0.29	0.12
A24 年齢や所属が違う人たちとも進んで関わり、多くを学ぶことができた。	0.17	0.04	0.72	0.01	-0.10	0.02	-0.09	-0.15
A27 身近な友人以外の人に、自分から関わっていくことはあまりなかった。	-0.03	0.07	-0.60	0.18	0.12	-0.07	0.36	0.07
A18 色々な挑戦はしなかったが、学校で出された課題はがんばってきた。	-0.05	-0.01	0.09	0.95	-0.09	-0.09	0.03	-0.07
A19 自発的にやった活動はあまりないが、学校の勉強は一生懸命にやった。	0.02	-0.06	0.08	0.92	-0.02	-0.11	0.00	0.07
A17 課外活動は特になかったが、授業には真面目に出て勉強してきた。	0.13	-0.08	0.09	0.80	0.06	-0.05	0.10	-0.02
A20 自ら率先する方ではないが、先生に指示されたことはしっかりやった。	0.07	-0.10	0.00	0.74	0.17	0.11	0.09	0.01
A36 学校では、人と関わる必要がない限り、1人で行動していた。	0.01	0.00	-0.02	-0.02	0.92	0.06	-0.29	0.08
A34 人と一緒に何かをやるより、1人で過ごすことが多かった。	-0.01	0.00	-0.02	0.11	0.85	0.14	-0.05	-0.21
A35 友人であっても、自分から進んで関わろうとはしなかった。	-0.19	0.01	-0.04	-0.01	0.83	-0.08	-0.18	0.16
A33 人との付き合いは面倒なので、できるだけ避けていた。	0.00	0.18	-0.13	0.03	0.75	-0.08	0.06	-0.22
A39 親しい友人には、自分の悩みや辛い経験も打ち明けていた。	0.06	-0.09	0.08	-0.13	0.11	0.84	0.09	0.13
A40 身近な友達には、ありのままの自分を見せることができていた。	0.10	-0.11	0.07	-0.09	-0.02	0.79	0.15	0.05
A38 友人とは、自分の本音を飾らずに語り合うようにしていた。	-0.09	0.18	0.22	0.08	-0.04	0.73	0.10	-0.13
A37 友達とは、将来の希望や不安などについても話していた。	0.11	-0.08	0.00	-0.03	0.04	0.67	0.01	0.04
A25 学校ではたいいてい、気の合う決まった友人と一緒に過ごしていた。	-0.18	0.15	-0.10	0.05	-0.29	-0.01	0.81	0.00
A26 交友関係を広げるよりも、仲の良い特定の友人といつも遊んでいた。	-0.06	-0.05	-0.27	0.11	-0.08	0.18	0.73	0.05
A28 自分のことをよく知る少数の友人と行動することが多かった。	0.03	0.00	-0.42	0.01	-0.01	0.17	0.69	0.08
A16 グループの人々と力を合わせて取り組み、一体感を感じた経験がある。	0.25	-0.17	0.12	-0.08	0.01	-0.15	0.16	0.79
A32 友人が辛いときに、悩みを聴いて励ましてあげることがよくあった。	-0.28	0.08	-0.12	-0.03	-0.16	0.24	-0.11	0.72
A30 誰かが困ったときに、手助けして感謝されることがよくあった。	0.01	0.23	-0.07	0.14	0.00	0.14	-0.09	0.62
A15 仲間と一緒に目標に向かってがんばり、充実感を得ることができた。	0.53	-0.14	0.08	-0.01	0.08	-0.12	0.16	0.55
A14 グループの活動で一生懸命に役割を果たして、みんなに認められた。	0.27	0.20	0.19	-0.07	0.11	-0.07	0.02	0.50
A13 色々な人たちと協力して、1つのことを成し遂げたことがある。	0.37	0.04	0.13	-0.07	0.08	0.00	0.17	0.48
A29 周りの人が忙しくて大変なときには、進んで手伝ってあげていた。	-0.04	0.30	-0.13	0.20	-0.09	0.17	-0.04	0.43
<b>因子寄与</b>	9.06	6.24	5.32	3.61	4.44	4.16	3.06	7.26

表2 学校生活における活動および対人関係の傾向・経験に関する因子間相関

	I	II	III	IV	V	VI	VII
II	0.45						
III	0.38	0.26					
IV	0.07	0.00	-0.13				
V	-0.28	-0.01	-0.21	0.14			
VI	0.21	0.25	0.11	0.07	-0.30		
VII	-0.07	-0.07	-0.06	0.19	0.21	0.02	
VIII	0.56	0.48	0.32	0.15	-0.20	0.36	0.03
							N=146

そして、因子分析によって抽出された8つの因子の因子得点を算出し、それぞれの要因の得点とした。

学校生活における活動と対人関係の傾向・経験の要因間において比較的高い相関がみられたのは、「活動へのコミットメントと達成」と「集団での協同とサポート提供」( $r=.56$ )、「集団におけるリーダーシップ」と「集団による協同とサポート提供」( $r=.48$ )および「活動へのコミットメントと達成」( $r=.45$ )、ある程度高かったのは、「多様な他者との積極的交流」と「活動へのコミットメントと達成」( $r=.39$ )および「集団での協同とサポート提供」( $r=.32$ )、「友人への自己開示と本来感」と「集団での協同とサポート提供」( $r=.36$ )においてであった。これに対し、「対人交流の回避と単独行動」と「友人への自己開示と本来感」( $r=-.30$ )および「多様な他者との積極的交流」( $r=-.21$ )には、それほど高くはないが負の相関がみられた。

## 2. 就業に対する態度

就業に対する態度に関する項目の回答について、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行ったところ、4因子が抽出された。分析に用いた項目と因子分析の結果を表3に、因子間の相関係数を表4に示す。

第1因子には、職務の遂行や困難への対処に関するスキルへの自信、能力向上や成果への肯定的期待を表す項目の負荷量が高いため、第1因子を「職務遂行への自己効力感」と命名した。第2因子には、就業に対する苦痛の予期、無意味感や強制感、関心や意欲の低さを表す項目の負荷量が高く、第2因子を「就業の拒否と無気力」と命名した。第3因子には、職務におけるコミュニケーション能力、対人関係の形成や葛藤解決に対する自信を表す項目の負荷量が高く、第3因子を「対人関係への自己効力感」と命名した。第4因子には、就業に対する重要性の認知と意欲の高さ、成果に向けて自発的に努力する傾向を表す項目の負荷量が高く、第4因子を「就業の重視と動機づけ」と命名した。そして、因子分析によって抽出された4つ

学校生活における活動および対人関係の傾向と経験が  
大学生の就業に対する動機づけと自己効力感に与える影響

の因子の因子得点を算出し、それぞれの要因の得点とした。

	I	II	III	IV
B23 自分は、仕事に必要な知識やスキルを身に付けていける。	0.95	0.07	0.01	-0.08
B22 私は、就職して仕事をうまくやり遂げていく能力を持っている。	0.83	-0.08	0.01	0.01
B24 職務の中で直面する様々な問題にも、適切に対処できると思う。	0.82	0.04	0.21	-0.11
B21 職業に就いたら、自分の仕事で良い成果を出すことができると思う。	0.71	0.00	0.06	0.16
B13 職業に就いて、自分の力を発揮するのが楽しみだ。	0.61	-0.07	0.01	0.27
B08 私は、働くことに対してやりがいや意義を見出せない。	0.03	0.89	0.03	-0.03
B15 仕事をしなければ生活できないので、仕方なく働くつもりだ。	0.01	0.87	-0.12	0.26
B07 自分がやりたい仕事の分野については、ある程度明確になっている。	-0.21	0.80	0.01	0.09
B05 働くようになって、人並み以上に努力しようとは思わない。	0.12	0.69	0.05	-0.25
B06 私は、仕事で業績を挙げることにあまり関心を持ってないと思う。	0.08	0.53	-0.05	-0.35
B26 私は、様々なタイプや年齢の人とも、上手に対応して仕事を進めていける。	0.00	-0.06	0.89	-0.06
B28 私は、職場の人々とうまく意思疎通を図り、協調して働くことができる。	0.03	0.07	0.83	0.14
B25 職場の上司や同僚と積極的に関わり、信頼関係を築くことができると思う。	0.06	-0.06	0.79	0.07
B27 仕事で意見が対立しても、適切に対話や交渉を行って解決できる。	0.18	-0.01	0.69	-0.06
B03 私にとって、職業生活を成功させることはとても重要である。	0.07	0.28	-0.01	1.00
B02 仕事で良い成果を挙げるために、進んで努力するつもりだ。	-0.14	-0.08	0.18	0.83
B01 就職したら、仕事に全力で取り組もうと思う。	-0.09	-0.14	0.14	0.76
B04 仕事に夢中で打ち込むことが、自分の生きがいになると思う。	0.27	-0.22	-0.32	0.59
<b>因子寄与</b>	<b>6.49</b>	<b>6.22</b>	<b>5.58</b>	<b>5.95</b>
				N=146

	I	II	III
II	-0.50		
III	0.61	-0.42	
IV	0.47	-0.65	0.37
			N=146

「就業の重視と動機づけ」は、「就業の拒否と無気力」との間に比較的強い負の相関( $r = -.65$ )がみられた一方、「職務遂行への自己効力感」( $r = .47$ )や「対人関係への自己効力感」( $r = .37$ )との間には正の相関がみられた。これに対し、「就業への拒否感と無気力」は、他の3つの因子すべてと負の相関が示された。「職務遂行への自己効力感」と「対人関係への自己効力感」との間にも比較的強い正の相関( $r = .61$ )がみ

られた。

### 3. 学校生活の活動と対人関係の傾向・経験が就業に対する態度に与える影響

学校生活における傾向・経験および対人関係の8要因を独立変数とし、就業に対する態度の4要因それぞれを従属変数とした重回帰分析を行った。まず、上記の8要因を独立変数とした重回帰分析を実施し、次に、偏回帰係数が5%水準で有意でない要因の中で最も係数が小さいものを除く7要因を独立変数とした重回帰分析を実施した。さらに、偏回帰係数が有意でない要因の中で最も係数が小さいものを除く6要因を独立変数とした重回帰分析を実施するといった手続きを繰り返し、5%水準で有意な係数を持つ要因のみを独立変数とした分析結果を、最終的な重回帰分析の結果とした。就業態度ごとの分析結果を表5に示す。

	就業の重視 と動機づけ		就業の拒否 と無気力		職務遂行への 自己効力感		対人関係への 自己効力感	
	活動へのコミットメントと達成	.33	**	-.18	*	.25	**	.32
集団におけるリーダーシップ	—		—		.17	*	—	
多様な他者との積極的交流	—		—		—		.28	**
正課への努力と課外活動の消極性	—		—		—		—	
対人交流の回避と単独行動	—		.27	**	—		—	
友人への自己開示と本来感	—		—		—		.26	**
固定した閉鎖的友人関係	—		.30	**	—		-.14	*
集団での協同とサポート提供	.23	**	-.23	**	.19	*	—	
					N=146 ** $p < .01$ * $p < .05$			

「就業の重視と動機づけ」に対しては、「活動へのコミットメントと達成」からの影響を表す偏回帰係数が.33( $p < .01$ )、「集団での協同とサポート提供」からの影響を表す偏回帰係数が.23( $p < .01$ )と有意であった。この重回帰モデルによる説明率を表す決定係数は、 $R^2 = .25$ ( $p < .01$ )であった。

「就業の拒否と無気力」に対しては、「固定した閉鎖的友人関係」からの偏回帰係数が.30( $p < .01$ )、「対人交流の回避と単独行動」からの偏回帰係数が.27( $p < .01$ )、「集団での協同とサポート提供」からの偏回帰係数が-.23( $p < .01$ )、「活動へのコミットメントと達成」からの偏回帰係数が-.18( $p < .05$ )と有意であった。決定係数は、 $R^2 = .37$ ( $p < .01$ )であった。

「職務遂行への自己効力感」に対しては、「活動へのコミットメントと達成」から



の偏回帰係数が.25( $p<.01$ )、「集団での協同とサポート提供」からの偏回帰係数が.19( $p<.05$ )、「集団におけるリーダーシップ」からの偏回帰係数が.17( $p<.05$ )と有意であった。決定係数は、 $R^2=.50(p<.01)$ であった。

「対人関係への自己効力感」に対しては、「活動へのコミットメントと達成」からの偏回帰係数が.32( $p<.01$ )、「多様な他者との積極的交流」からの偏回帰係数が.28( $p<.01$ )、「友人への自己開示と本来感」からの偏回帰係数が.26( $p<.01$ )、「固定した閉鎖的友人関係」からの偏回帰係数が-.14( $p<.05$ )と有意であった。決定係数は、 $R^2=.40(p<.01)$ であった。

## 4. 考 察

### 1. 学校生活の活動と対人関係および就業態度に関する要因の抽出と関係性

高校から大学にかけての学校生活における活動と対人関係の傾向・経験に関する項目への回答に対して因子分析を行った結果、「活動へのコミットメントと達成」、「集団におけるリーダーシップ」、「多様な他者との積極的交流」、「正課への努力と課外活動の消極性」、「対人交流の回避と単独行動」、「友人への自己開示と本来感」、「固定した閉鎖的友人関係」、「集団での協同とサポート提供」の8つの因子が抽出された。

学校生活において関心ある活動に熱中したり、目標のために努力して達成し、成長するという傾向・経験と、集団メンバーと協力して成果を挙げたり、周囲の人を助けて感謝されるという傾向・経験、正課である学業には堅実に努力しながら、課外活動には自発的に参加しないという傾向・経験が、それぞれ独立した異なる活動の傾向・経験であることが見出された。また、自分と属性や意見の異なる人々と積極的に交流して成長するという傾向・経験と、友人に悩みや将来について自己開示し、自分らしくいられる傾向・経験、特定の親しい友人と固定した閉鎖的な交流を行う傾向・経験が、それぞれ独立した異なる対人関係の傾向・経験であることも示された。

「活動へのコミットメントと達成」と「集団での協同とサポート提供」との相関は高く、これらの傾向・経験は、部活動やアルバイトなど集団活動への参加を通して同時に得られていることが多いと思われる。また、「集団におけるリーダーシップ」と上記2要因との相関も比較的高く、集団活動においてリーダーの役割を与えられ、メンバーをまとめて成果を上げるという傾向・経験を持つ学生は、集団活動の中で、目標のために努力して達成したり、メンバーと協力して成果を上げるといった経験も同時に得ていると推察される。

さらに「多様な他者との積極的交流」は、「活動へのコミットメントと達成」および「集団での協同とサポート提供」との相関がある程度高かった。「活動へのコミッ

トメントと達成」や「集団での協同とサポート提供」といった活動の傾向・経験を持つ学生は、その活動に参加する中で、多様な属性や意見を持つ人々と交流する機会を持つことができ、成長を実感していることが伺える。

一方、「対人交流の回避と単独行動」は、「多様な他者との積極的交流」や「友人への自己開示と本来感」との間に負の相関が示された。他者との交流を避けて1人で行動するという傾向・経験を持つ学生は、自分と異なる属性や意見を持つ人と交流するなど、幅広い対人関係が難しいだけでなく、身近な友人関係においても内面的な自己開示を行えず、自分らしくいられないなど、特定の友人と親密な関係を築くことも難しいといえる。

次に、就業への態度に関する項目への回答に対して因子分析を行なった結果、「就業の重視と動機づけ」、「就業の拒否と無気力」、「職務遂行への自己効力感」、「対人関係への自己効力感」の4つの因子が抽出された。働くことを重要と考え、関心や意欲を持って、自発的に成果を挙げようとする肯定的な就業態度と、働くことに意味を感じず、苦痛や強制感を予期して意欲を持ってないという否定的な就業態度が、独立した態度であることが見出された。この2つの因子間の負の相関は比較的高く、相互に関係していると考えられるが、例えば、働くことを重要と考えて成果を挙げようとしながらも、同時に、働くことを苦痛で強制されるものと予期しているなど、葛藤を持つ学生もいる可能性がある。

また、就業に関する自己効力感についても、職務上の課題遂行や困難への対処、これらの能力向上など職務自体に関する自己効力感と、職務で関わる人々との関係形成や協同、葛藤への対処など対人関係に関する自己効力感が、独立した就業態度であることが示された。これらの態度の相関もある程度高いことから、職務遂行に関する自信と対人関係に関する自信は関連し合っていると考えられるが、一方で、職務の遂行自体に関しては自信があるものの、職務における対人関係の形成・維持にはあまり自信がない学生も存在することが示唆される。

「職務への自己効力感」は、「就業の重視と動機づけ」との正の相関や、「就業の拒否と無気力」との負の相関も比較的高かった。学校生活における経験を通して、職務遂行に関する自信を高めることができた学生は、「就業の重視と動機づけ」のような肯定的な就業態度も獲得していくといえる。反対に、こうした自信を築けなかった学生は、「就業の拒否と無力感」のような否定的な就業態度を持ちやすいと推察される。

「対人関係への自己効力感」も、「就業の重視と動機づけ」との正の相関や「就業の拒否と無気力」との負の相関がある程度高かった。学校生活における経験を通して、職務における対人関係の維持・形成に関する自信を持つことができた学生は、「就業の重視と動機づけ」のような肯定的な就業態度を持つようになるのに対し、こうした自信を持てなかった学生は、「就業の拒否と無気力」のように否定的な就業態度を形成してしまうといえる。

## 2.学校生活における活動と対人関係が就業の重視と動機づけに与える影響

学校生活における活動と対人関係の傾向・経験に関する8要因を独立変数とし、「就業の重視と動機づけ」を従属変数として重回帰分析を行った結果、「活動へのコミットメントと達成」および「集団での協同とサポート提供」の2つの要因が有意な肯定的影響を与えていた。

学校生活において、学業や部活動、アルバイトなどの関心ある活動に熱中したり、目標のために努力して達成し成長するといった傾向・経験や、集団活動でメンバーと協力して成果を挙げたり、周囲の人を助けて感謝されるといった傾向・経験を有していた学生は、就業生活においても同様の行動を通して肯定的な結果を得られるという期待を高めるだろう。こうした学生は、働くことを重要と考え、関心や意欲を持ち、自発的に成果を挙げようとするといえる。

一方、「集団におけるリーダーシップ」は有意な影響を持っていなかった。ただし「集団におけるリーダーシップ」は、「活動へのコミットメントと達成」や「集団での協同とサポート提供」との相関が高かったことから、集団活動においてリーダーの役割を与えられ、メンバーをまとめて成果を挙げるといった傾向・経験を持つ学生は、こうした活動を通して、目標のために努力して達成したり、集団メンバーと協力して成果を挙げるなどの傾向・経験も同時に得やすいため、間接的に「就業の重視と動機づけ」を高めると推察される。

「正課への努力と課外活動の消極性」も有意な影響がみられなかった。正課として決められた学業に努力していても、課外活動には自発的に参加しない学生は、「就業の重視と動機づけ」のような肯定的な就業態度を必ずしも持てるわけではないが、こうした態度が特に低いわけでもないといえる。「正課への努力と課外活動の消極性」の特徴に当てはまる学生は、決められた職務を遂行することには、ある程度自信が持てる一方、職務の中で自発的に行動することへの自信は低いといったように、就業に対して両面的な態度を合わせ持っているのかもしれない。

肯定的な対人関係の傾向・経験を示す、「多様な他者との積極的交流」や「友人への自己開示と本来感」も、否定的な対人関係の傾向を示す、「対人交流の回避と単独行動」や「固定した閉鎖的友人関係」も、「就業の重視と動機づけ」との有意な関係は示されなかった。このような対人関係の傾向・経験は、学生生活の活動における課題遂行やそこでの経験に直接関連しないため、「就業の重視と動機づけ」に対しても影響を与えにくいのかもしれない。

ただし、「多様な他者との積極的交流」や「友人への自己開示と本来感」は、「活動へのコミットメントと達成」や「集団での協同とサポート提供」に対して、強くはないものの正の相関があり、「対人交流の回避と単独行動」もこれらの2要因と負の相関があったことから、多様な他者と積極的に関わったり、友人に内面的な開示ができるといった肯定的な対人関係の傾向・経験が、部活動やアルバイトなど、他

者との交流がある活動への積極的な参加を促し、その中で、目標のために努力して達成したり、他者と協力し成果を挙げるといった経験を得ることによって、間接的に「就業の重視と動機づけ」を高めた可能性もある。反対に、他者との交流を避けて1人で行動するという否定的な対人関係の傾向・経験が、上記のような他者との交流がある活動への参加を妨げてしまい、目標のために努力して達成したり、他者と協力して成果を挙げるといった経験をしなかった結果、間接的に「就業の重視と動機づけ」のような肯定的な就業態度を身に付けられなかったことも考えられるだろう。

### 3. 学校生活の活動と対人関係が就業の拒否と無気力に与える影響

学校生活における活動と対人関係の傾向・経験に関する8要因を独立変数とし、「就業の拒否と無気力」を従属変数として重回帰分析を行った結果、「集団での協同とサポート提供」および「活動へのコミットメントと達成」が否定的な影響を与えており、「固定した閉鎖的友人関係」および「対人交流の回避と単独行動」が有意な肯定的影響を与えていた。

関心ある活動に熱中したり、目標のために努力して達成し、成長するといった傾向・経験や、集団活動でメンバーと協力し成果を挙げたり、周囲の人を助けて感謝されるといった傾向・経験を持つことなく、学校生活を無為に過ごした学生は、就業生活に対して肯定的な期待を持ってない結果、働くことに意味を感じず、苦痛や強制感を予期して、意欲を持ってないという否定的な就業態度を持つようになるといえる。

しかし、「集団におけるリーダーシップ」は、「就業の拒否と無気力」に有意な影響が示されなかった。ただし、「集団におけるリーダーシップ」は、先述のように「活動へのコミットメントと達成」や「集団での協同とサポート提供」との相関が高いことから、集団活動においてリーダーの役割を与えられ、メンバーをまとめて成果を挙げるといった傾向・経験を持つ学生は、目標のために努力して達成したり、集団メンバーと協力して成果を上げるなどの経験を通して、間接的に、「就業の拒否や無気力」のような否定的な就業態度が低くなる可能性はある。また、「正課への努力と課外活動の消極性」も、「就業の拒否と無気力」への有意な影響が示されなかった。「就業の重視と動機づけ」に関する考察と同様に、正課である学業に努力しながらも、課外活動には自発的に参加しなかった学生は、「就業の拒否や無気力」のような否定的な就業態度を必ずしも持つわけではないが、こうした態度が特に低いわけでもないことがわかる。

学校生活における対人関係の影響に関しては、特定の親しい友人とのみ交流していたり、他者との交流を避けて1人で行動するなど、友人関係上の問題を持つ学生は、「就業の拒否と無気力」が高い傾向がみられた。就業生活においては一般に、他者との交流を避けたり、親しい関係の人とのみ関わって働くことはできない。した

がって、上記のような対人関係の傾向・経験を持つ学生は、働くことに意味を感じず、苦痛や強制感を予期して、意欲を持ってないのだといえる。

一方、「多様な他者との積極的交流」と「友人への自己開示と本来感」は、「就業の拒否と無気力」に有意な影響を持たなかった。多様な他者と交流するといった積極的な対人行動をとれなくても、また、友人に内面的な自己開示を行うような関係を築けなくても、必ずしも就業に対して否定的な態度を持っているわけではない。ただし先述のように、「多様な他者との積極的交流」と「友人への自己開示と本来感」は、「活動へのコミットメントと達成」や「集団での協同とサポート提供」との相関があったことから、これらの肯定的な対人関係の傾向・経験を持たない学生は、部活動やアルバイトなど、他者との交流がある活動への参加に消極的となり、目標のために努力して達成したり、他者と協力して成果を挙げるなどの経験ができない結果、「就業の拒否感と無気力」のように否定的な就業態度を持ってしまうと考えることもできる。

#### 4. 学校生活における活動と対人関係が職務遂行への自己効力感に与える影響

学校生活における活動と対人関係の傾向・経験に関する8要因を独立変数とし、「職務遂行への自己効力感」を従属変数として重回帰分析を行った結果、「活動へのコミットメントと達成」、「集団での協同とサポート提供」、「集団におけるリーダーシップ」が有意な肯定的影響を与えていた。

関心ある活動に熱中したり、目標のために努力して達成し成長するといった傾向・経験や、集団活動でメンバーと協力して成果を挙げたり、周囲の人を助けて感謝されるといった傾向・経験を持つ学生、加えて、集団活動においてリーダーの役割を与えられ、メンバーをまとめて成果を挙げるといった傾向・経験を持つ学生ほど、学業や課外活動で取り組んだ課題の遂行について自信を持つようになると思われる。その結果、職務上の課題遂行や困難への対処、これらの能力向上に関する自信も高くなると考えられる。

一方、「正課への努力と課外活動の消極性」は有意な影響がなく、正課として与えられた学業に努力していても、自発的に課外活動に参加して、その中で取り組む課題の遂行能力を身につけるような経験を持たなければ、職務遂行に関する自信を持つことは難しいと思われる。また、「多様な他者との積極的交流」や「友人への自己開示と本来感」のような肯定的な傾向・経験も、「対人交流の回避と単独行動」や「固定した閉鎖的友人関係」のような否定的な傾向・経験も有意な影響はみられず、対人関係の傾向・経験が、職務遂行に関する自信を直接高めることはないと解釈できる。

ただし先述の通り、「多様な他者との積極的交流」と「友人への自己開示と本来感」は、「活動へのコミットメントと達成」、「集団での協同とサポート提供」、「集団にお

けるリーダーシップ」との相関がみられた。これらの肯定的な対人関係の傾向・経験を持つ学生は、学校生活において様々な活動に対して積極的に参加しようとする結果、目標のために努力して達成したり、集団メンバーと協力して成果を挙げる経験、あるいはリーダーとしてメンバーをまとめて成果を挙げるといった経験を得ることができ、間接的に、職務に関する自信を高めた可能性もある。反対に、他者との交流を避けて1人で行動する傾向・経験を持つ学生は、学業や課外活動などの活動に対する参加も回避しやすいために、こうした活動で取り組む課題の遂行能力を身につける経験を得られなかった結果、職務遂行に関する自信も低くなると考えることができる。

### 5. 学校生活の活動と対人関係が対人関係への自己効力感に与える影響

学校生活における活動と対人関係に関する8つの要因を独立変数とし、「対人関係への自己効力感」を従属変数として重回帰分析を行った結果、「活動へのコミットメントと達成」、「多様な他者との積極的交流」、「友人への自己開示と本来感」が肯定的な影響を、「固定した閉鎖的友人関係」が否定的な影響を与えていた。

年齢や関心などの類似性が高い友人を超えて、多様な属性や意見を持つ他者と積極的に交流し成長するという対人関係の傾向・経験を持つ学生ほど、就業生活において関わる人々との関係形成や協同作業、葛藤への対処に対して自信を持てるようになることがわかる。また、職務上の公式的なコミュニケーションをうまく行うだけでなく、職場のメンバーに仕事の相談をするなど親密な関係を築くことも、就業生活に適応するためには重要である。友人に悩みや将来などを自己開示し、自分らしくいられるといった親密な友人関係を築く傾向・経験も、職務上の対人関係に関する自信を高める効果があった。

このように、友人の範囲を超えて多様な他者と交流するという幅広い対人関係を築く傾向・経験だけでなく、親しい友人に内面を開示するという親密な対人関係を築く傾向・経験も、職務上の対人関係に関する自信を高めることが示された。反対に、特定の親しい友人とだけ関わり、それ以外の人々と交流しない傾向・経験を持つ学生は、特定の親しい関係の範囲を超えて様々な人々と関係を築くことが必要となる職務上の対人関係に対して自信を持っていないことも明らかとなった。

一方で、「対人交流の回避と単独行動」は有意な影響を与えていなかった。「対人交流の回避と単独行動」は、「固定した閉鎖的友人関係」とある程度の相関があったため、この要因の影響を除いた偏回帰係数が有意にならなかったこともその一因と考えられる。いずれにせよ、この結果は、他者との交流自体を避けようとする消極的な対人関係の傾向・経験が、多様な他者と関係を築く必要があるような職務上の対人関係に対する自信にあまり影響を与えていないことを示しており、その理由について、より詳細な検討を行う研究が必要だろう。

また、対人関係の傾向・経験ではない「活動へのコミットメントと達成」が、職

務上の対人関係に対する自己効力感に比較的強い影響を与えていた。部活動やアルバイトなど、学校生活で取り組む多くの活動は、目標達成に向けて集団メンバーと関係を築く必要があるため、学校生活において関心ある活動に熱中したり、目標のために努力して達成し成長できた学生は、職務をうまく遂行できるという自信を持つと同時に、職務における対人関係の形成・維持に対しても自信を持つことができると思われる。反対に、学校生活でこうした活動に参加することなく無為に過ごした学生は、他者と関係を築きながら目標を達成する経験を持てなかった結果、職務上の対人関係に関する自信を持つことも難しかったといえるだろう。

「集団での協同とサポート提供」は、他者と協力したり支援する経験を通して、職務上の対人関係への自己効力感を高めると予想されたが、有意な影響はみられなかった。「集団での協同とサポート提供」は、「活動へのコミットメントと達成」との間にある程度強い相関がみられたことから、この要因の影響を除いた偏回帰係数が有意にならなかったのかもしれない。この結果は、集団でメンバーと協同するような活動に参加するだけで、職務上の関係形成や葛藤対処への自信を築けるわけではなく、こうした自信を持つためには、集団活動においても、目標のために努力して達成し成長できた経験が重要であることを示唆している。

## 6.本研究の成果と今後の課題

全体として、「就業の重視と動機づけ」や「職務遂行への自己効力感」のような就業に対する肯定的態度に強い影響を与えていたのは、「活動へのコミットメントと達成」および「集団での協力とサポート提供」であった。学生生活において、活動に熱中し目標のために努力したり、集団メンバーと協力して成果を挙げるなどの活動の傾向・経験を持っている学生ほど、働くことを重要と考え、関心と意欲を持って成果を挙げようとする態度を獲得すると同時に、職務の遂行や困難への対処、それらの能力の向上に対して自信を持つようになることが明らかになった。また、集団活動でリーダーの役割を与えられ、メンバーをまとめて成果を挙げるという傾向・経験も、職務遂行に関する自信を高めていた。

「就業の拒否と無気力」に対しては、「活動へのコミットメントと達成」と「集団での協同とサポート提供」が負の影響を与えていたと共に、「対人交流の回避と単独行動」や「固定した閉鎖的友人関係」のような消極的な対人関係の傾向・経験も影響を与えていた。何らかの活動に熱中し目標のために努力したり、集団メンバーと協力して成果を挙げるなどの傾向・経験を持つことなく、学生生活を無為に過ごした学生に加えて、他者との交流を避けて1人で行動したり、特定の親しい友人とだけ交流するといった消極的な対人関係の傾向・経験を持つ学生も、働くことに意味を感じず、苦痛や強制感を予期して意欲を持ってないという否定的な就業態度を形成していることが見い出された。

一方、「対人関係への自己効力感」に影響を与えていたのは、主に「多様な他者との積極的交流」のような幅広い対人関係と、「友人への自己開示と本来感」のような親密な対人関係という2つのタイプの対人関係を築く傾向・経験であった。反対に、特定の親しい友人とのみ交流するという「固定した閉鎖的友人関係」を持つ学生ほど、職務上の対人関係に関する自信を築くことが難しい傾向にあった。また、「活動へのコミットメントと達成」のような積極的な活動の傾向・経験も、職務における対人関係の形成・維持に関する自信の形成を促していた。

上記4つの就業態度は独立した要因であるものの、相互に関連していることも示された。例えば、学校生活における活動や対人関係によって、就業における職務遂行や対人関係に関する自信を築いたことで、働くことを重視し、関心や意欲を持つようになったり、こうした自信が持てなかった学生が、就業を苦痛と考え、意欲を持てなくなるかもしれない。また、学校生活における多くの活動は、何らかの課題を遂行する機会だけでなく、所属集団のメンバーと協同する機会も伴っているため、就業生活における職務遂行に関する自信と対人関係に関する自信は、一般的に、学校生活での活動を通して共に獲得されていくと考えられる。

以上のように本研究では、大学生の就業に対する態度が、学生生活におけるどのような活動と対人関係の傾向・経験によって形成されているのかについて概観的に示すことができた。ただし、4つの就業態度に関する重回帰分析の決定係数は、「職務遂行への自己効力感」が $R^2=.50$ とある程度高かったものの、「就業の重視と動機づけ」が $R^2=.25$ 、「就業の拒否と無気力」が $R^2=.37$ 、「対人関係への自己効力感」が $R^2=.40$ と全体として低かった。この結果は、本研究で取り上げた学校生活における活動と対人関係の傾向・経験だけでは、大学生の就業態度の形成を十分に説明できていないことを表しており、特に「就業の重視と動機づけ」のような就業自体に対する肯定的態度に対する説明力が弱かったといえる。したがって、大学生の就業態度が、これらの傾向・経験以外のどのような要因によって影響を受けて形成されているのかについて検討していくことが必要だろう。例えば、家庭における教育や家族との関係、高校・大学時代以前の学校生活における経験、現在までに会った教師など年長者との交流や彼らの言動が、大学生の就業に対する態度の形成に影響を与えているかもしれない。

また本研究の結果は、1つの時点における質問紙調査のデータから得られた相関関係に基づいており、働くことに対する意欲や自信のような態度が、学校生活における様々な活動や対人関係を通して、どのように形成されていくのかという時間的な過程については明らかにしていない。こうした問題については、継時的な質問紙調査やインタビュー調査を含めて、今後さらなる研究を行っていくことが求められる。



## 引用文献

- 相川充 (1991) 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究. *心理学研究*,62(3),149-155.
- 安達智子 (2001) 進路選択に対する効力感と就業動機, 職業未決定の関連について-女子短大生を対象とした検討-. *心理学研究*,72(1),10-18.
- 安達智子 (2006) 大学生の仕事活動に対する自己効力の規定要因. *キャリア教育研究*,24(2),1-10.
- 秋元政則 (2012) 「社会人基礎力」の形成と就職活動に対する課外活動の意義: チームワーク要求型授業との比較から. *Benesse 教育研究開発センター研究所報*,64,76-87.
- 青谷法子・三宅章介 (2005) 企業と若年者の仕事に関するミスマッチとキャリア形成についての一考察-特に、コミュニケーションの果たす役割を中心にして. *東海学園大学研究紀要: 経済・経営学研究編*,10,1-24.
- 浅井千秋 (2014) 達成経験と社会的サポートがキャリア成熟性に与える影響 *東海大学教育研究所紀要*,22,31-43.
- Bazerman, M.H., & Neale, M.A. (1992) *Negotiating Rationally*. Simon & Schuster, Inc. 奥村哲史(訳) (1997) 『マネージャーのための交渉の認知心理学-戦略的思考の処方箋-』 白桃書房
- Barber, B.L., Eccles, J.S., & Stone, M.R. (2001) Whatever happened to the Jock, the Brain, and the Princess? Young adult pathways linked to adolescent activity involvement and social identity. *Journal of Adolescent Research*,16(5),429-455.
- Betz, N.E., & Hackett, G. (1981) The relationship of career-related self-efficacy expectations to perceived career options in collage women and men. *Journal of Counseling Psychology*,28,399-410.
- Blau, G.J. (1988) Further exploring the meaning and measurement of career commitment. *Journal of Vocational Behavior*,32,284-297.
- Blustein, D.L. (1989) The role of goal instability and career self-efficacy in the career exploration process. *Journal of Vocational Behavior*,35,194-203.
- Bohnert, A.M., Aikins, J.W., & Eddin, J. (2007) The role of organized activities in facilitating social adaptation across the transition to college. *Journal of Adolescent Research*,22(2),189-208.
- Buhrmester, D., Furman, W., Wittenberg, M.T., & Reis, H.T. (1988) Five Domains of Interpersonal Competence in Peer Relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*,55(6),991-1008.
- Crites, J.O., Wallbrown, F.H., & Blaha, J. (1985) The career maturity inventory: Myths and realities - A rejoinder to Westbrook, Cutts, Madison, and Arica (1980). *Journal of Vocational Behavior*,26,221-238.

- 榎本享子 (1999) 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化. *教育心理学研究*,47,180-190.
- Erikson, E.H. (1968) *Identity: Youth and Crisis*. New York: W.W. Norton. 中島由恵(訳) (2017) 『アイデンティティ・青年と危機』 新曜社.
- Fredricks, J.A., & Eccles, J.S. (2008) Participation in extracurricular activities in the middle school years: Are there developmental benefits for African American and European American youth? *Journal of youth and adolescence*,37,1029-1043.
- 後藤学・大坊郁夫 (2003) 大学生はどんな対人場面を苦手とし、得意とするのか? : コミュニケーション場面に関する自由記述と社会的スキルとの関連. *対人社会心理学研究*,3,57-63.
- Greenhaus, J.H. (1973) Factorial investigation of career salience. *Journal of Vocational Behavior*,3,95-98.
- Greenhaus, J.H., & Simon, W.F. (1976) Self-esteem, career salience, and choice of ideal occupation. *Journal of Vocational Behavior*,8,51-58.
- Hackett, G. (1995) Self-Efficacy in Career Choice and Development. In Bandura, A. (Ed.), *Self-Efficacy in Changing Societies* (pp.232-258). New York: Cambridge University Press.
- 萩原悟一・磯貝浩久 (2014a) ソーシャルサポートの授受と競技者アイデンティティの関連に着目したスポーツ・コミットメント形成モデルの検討. *運動とスポーツの科学*,20(1),67-75.
- 萩原悟一・磯貝浩久 (2014b) スポーツチームにおけるソーシャルサポート提供・受領尺度作成の試み. *スポーツ産業学研究*,24(1),49-62.
- 原澤奈美 (2017) 女子大生の自己受容および本来感と周囲の他者からの被受容感の関連. *日本女子大学大学院人間社会研究科紀要*,23,117-138.
- 畑野快 (2010) 青年期後期におけるコミュニケーションに対する自信とアイデンティティとの関連性. *教育心理学研究*,58(4),404-413.
- 畑野快・溝上慎一 (2013) 大学生の主体的な授業態度と学習時間に基づく学生タイプの検討. *日本教育工学会論文誌*,37(1),13-21.
- Hayes, J. (2002) *Interpersonal Skills at Work*. Routledge.
- 日瀨淳子・森口竜平・小山田祐太・齋藤誠一・城仁士 (2009) 正課外活動によって得られる能力尺度の開発. *神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要*,2(2),129-134.
- 平井博志・木内敦詞・中村友浩・浦井良太郎 (2012) 大学期における課外活動の種類とライフスキルの関係. *大学体育学*,9(0),117-125.
- 平石賢二 (1993) 青年期における自己意識の発達に関する研究(II) : 重要な他者からの評価との関連. *名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科)*,40,99-125.
- Hirschi, A., Lee, B., Porfeli, E.J., & Vondracek, F.W. (2013) Proactive motivation and engagement in career behaviors: Investigating direct, mediated, and Moderated effects. *Journal of Vocational Behavior*,83,31-40.
- Holland, J.L. (1985) *Making Vocational Choices*, 2nd.Edition. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

- 堀匡 (2009) 大学生のソーシャルサポート提供に関連するソーシャルスキルの探索. 広島大学大学院教育学研究科紀要. 第三部, 教育人間科学関連領域,58,169-176.
- 堀岡園子 (2010) 青年の友人関係および集団活動への関わり方と自我同一性との関連. 北星学園大学大学院論集,1,85-97.
- 保阪享・岡本達也 (1986) キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討. 心理臨床学研究,4(1),17-26.
- 堀田裕司・大塚泰正 (2014) 製造業における労働者の対人的援助とソーシャルサポート, 職場ストレスナー, 心理的ストレス反応, 活気の関連. 産業衛生学雑誌,56(6),259-267.
- 藤木清・竹田茂生 (2005) キャリア開発のための基礎的スキルに関する研究. 関西国際大学研究紀要,6,51-62.
- 藤澤広美・原口恭彦 (2019) 大学生の進路選択自己効力感と学習との関連—社会的スキルの媒介効果に着目して—. キャリア教育研究,37(2),23-34.
- 藤原和政・河村茂雄 (2016) 高等学校における学校適応を促す部活動のあり方：部活動の種類と積極性を考慮した検討. 学校カウンセリング研究,(16)17-22.
- 福岡欣治 (2007) 日常ストレス状況での友人への自己開示とソーシャル・サポート(2):開示に対する友人からのサポートとその影響. 静岡文化芸術大学研究紀要,7,53-57.
- 福重清 (2016) 2000年代の都市青年の人間関係：友人関係をめぐる10年間の変化. 専修人間科学論集(社会学篇),6,113-120.
- 古市裕一 (1995) 青年の職業忌避的傾向とその関連要因についての検討,進路指導研究,16(0),16-22.
- 古市裕一 (2007) 青年の職業志向傾向と就業動機および自己効力感. 岡山大学教育学部研究集録,136(1),145-151.
- 古市裕一 (2012) 青年の職業忌避的傾向と自己効力感および就業不安. 岡山大学大学院教育学研究科研究集録,151,43-50.
- 古市裕一・久尾敏子 (2007) 青年の職業忌避的傾向と就業不安および進路決定効力感. 岡山大学教育学部研究集録,135(1),1-7.
- 古田克利 (2012) キャリア自信に対するインターンシップ経験とサークル活動の交互作用効果：就職活動中の大学生に対するアンケート調査の分析を通じて. インターンシップ研究年報,15(0),9-16.
- 古田克利 (2018) 学生生活の意味深さと職業観およびキャリア意識との関連—人文系初年次学生を対象として—. キャリア教育研究,37(1),1-10.
- 飯田順子・青山郁子・堀口康太・藤原健志・大川一郎・杉本希映・遠藤寛子 (2020) 多様性と困難への寛容度尺度の日本語版の作成と信頼性・妥当性の検討. 日本教育心理学会総会発表論文集,62(0),305.
- 飯島佐知子・賀沢弥貴・平井さよ子 (2008) 自己効力感および職業レディネスによる看護大学生の看護管理実習の効果の評価に関する研究. 愛知県立看護大学紀要,14,9-18.

- 池田めぐみ・伏木田稚子・山内祐平 (2018) 大学生のクラブ・サークル活動への取り組みがキャリアレジリエンスに与える影響. 日本教育工学会論文誌,42(1),1-14.
- 池田めぐみ・伏木田稚子・山内祐平 (2019) 大学生の準正課活動への取り組みがキャリアレジリエンスに与える影響. 日本教育工学会論文誌,43(1),1-11.
- 石田靖彦 (1998) 友人関係の親密化に及ぼすシャイネスの影響と孤独感. 社会心理学研究,14(1),43-52.
- 石田靖彦 (2003) 友人関係の形成過程におけるシャイネスの影響: 大学新入生の縦断的研究. 対人社会心理学研究,3,15-22.
- 石田靖彦・小島文 (2009) 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連～仲間集団の形成・所属動機という観点から～. 愛知教育大学研究報告(教育科学編),58,107-113.
- 石井美穂・平山栄治・野村和孝・前田駿太・嶋田洋徳 (2015) 大学生のアイデンティティと自己効力感が職業未決定に及ぼす影響の検討. 早稲田大学臨床心理学研究,15(1),45-52.
- 石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平 (2009) 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連. 発達心理学研究,20(2),125-133.
- 伊多波美奈・首藤敏元 (2016) 大学生におけるボランティア経験とボランティア活動に期待する成果、自己効力感、及び協調性との関連. 埼玉大学紀要教育学部,65(2),35-46.
- 岩脇千裕 (2008) 理想の人材像と若者の現実-大学新卒者採用における行動特性の能力指標としての妥当性. 日本労働政策研究研修機構ディスカッションペーパーシリーズ 08-04,1-37.
- 泉谷道子・安野舞子 (2016) 日本人大学生のリーダーシップ・アイデンティティ発達過程の探究. 産業・組織心理学研究,30(1),59-69.
- 城佳子 (2010) 大学生のハーディネスとコーピング、ライフイベントの関連の検討. 生活科学研究,32,37-47.
- 片受靖・庄司一子 (2000) 勤労者のソーシャルサポートの互惠性が精神的健康に与える影響. カウンセリング研究,33(3),249-255.
- 片山紀子・水野雄希 (2017) 教員の自己開示は、仕事を充実させるか: 教員経験年数の違いに着目して. 京都教育大学紀要,131,47-60.
- 姜信善・松田栞里 (2020) 青年期における友人関係と精神的健康との関連についての検討. 富山大学人間発達科学部紀要,14(2),1-14.
- 柏木仁 (2014) キャリア研究におけるコーリングの概念的特徴の明確化に向けて—コーリングとキャリア関連変数との関係性およびタイプ分け—. 経営行動科学,27(3),209-224.
- 川本哲也 (2015) 成人形成期のアイデンティティと複数の社会的関係性の関連: 養育者・友人・恋人に対するアタッチメント・スタイルの違いに注目して. 発達心理学研究,26(3),210-224.
- 川瀬隆千 (2016) 宮崎公立大学学生の進路選択自己効力の要因としての遂行体験. 宮崎公立大学人文学部紀要,23(1),1-12.
- 風間文明・山下倫実 (2019) 新規学卒就職者の職場適応の規定因に関する縦断的研究. 十文字学

- 園女子大学紀要,50,3-17.
- 木村充 (2014) 就職時の探求. 中原淳・溝上慎一(編) 『活躍する組織人の探求-大学から企業へのトランジション-』 東京大学出版会,91-116.
- 木村充・河井亨 (2012) サービス・ラーニングにおける学生の経験と学習成果に関する研究：立命館大学「地域活性化ボランティア」を事例として. 日本教育工学会論文誌,36(3),227-238.
- 児玉真樹子 (2015) キャリアレジリエンスの構成概念の検討と測定尺度の開発. 心理学研究 86(2),150-159.
- 児玉真樹子 (2019) 小・中・高等学校におけるキャリア教育の啓発的経験の効果:大学生を対象とした調査広島大学大学院教育学研究科紀要,68,1-10.
- 児玉真樹子・松田敏志・戸塚唯氏・深田博己 (2003) 大学生の進路選択行動に及ぼす自己効力および職業的アイデンティティの影響. 広島大学心理学研究,2,63-72.
- 小杉大輔・手島裕詞 (2010) 理工系大学 2-3 年生における学習の動機づけと進路選択に対する自己効力感との関連. 静岡理工科大学紀要,18,117-121.
- 小杉礼子 (2007) 需給両面の変化に対する大学のキャリア形成支援の課題. キャリア教育研究,25,1-14.
- 河本愛子 (2014) 中学・高校における学校行事体験の発達の意義：大学生の回顧的意味づけに着目して. 発達心理学研究,25(4),453-465.
- 高坂康雅 (2010) 青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向. 教育心理学研究,58(3),338-347.
- 厚生労働省 (2004) 『若年者の就職能力にかんする実態調査』
- 黒川雅幸 (2006) 仲間集団外成員とのかかわりが級友適応へ及ぼす影響. カウンセリング研究,39(3),192-201.
- 黒川雅幸・吉田俊和 (2007) 個人の集団透過性に関する構成概念妥当性の検証. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学),54,1-10.
- 楠奥繁則 (2009) 大学生の進路選択セルフ・エフィカシー研究:KiSS-18 からのアプローチ. 対人社会心理学研究,9,109-116.
- Lent, R.W., Brown, S.D., Talleyrand, R., McPartland, E.B., Davis, T., Chopra, S.B., Alexander, M.S., Suthakaran, V., & Chai, C. (2002) Career choice barriers, supports and coping strategies: College students' experiences. *Journal of Vocational Behavior*,60,61-72.
- London, M. (1983) Toward a theory of career motivation. *Academy of Management Review*,8(4),620-630.
- 牧郁子・関口由香・山田幸恵・根建金男 (2003) 主観的随伴経験が中学生の無気力感に及ぼす影響. 教育心理学研究,51(3),298-307.
- 牧郁子・関口由香・根建金男 (2006) 中学生における無気力感モデル検討の試み--随伴性とコ

- ーピング・エフィカシーの影響から. *カウンセリング研究*,39(3),181-191.
- 真鍋和博 (2010) インターンシップタイプによる基礎力向上効果と就職活動への影響. *日本インターンシップ学会年報*,13,9-17.
- 松本恵美 (2022) 高校生の仲間関係の排他性に対人関係における受容性と仲間集団の閉鎖性が与える影響について 一性差に着目して一. *東北教育心理学研究*,15,29-37.
- 松本卓三 (1993) 進路選択に関係する職業的同一性・原因帰属・達成動機. *進路指導研究*,14(0),17-26.
- 松永真由美・岩元澄子 (2008) 現代青年の友人関係に関する研究. *久留米大学心理学研究*,7,77-86.
- 松島るみ・塩見邦雄 (2000) シャイネスと社会的スキルの関連が自己開示に及ぼす影響. *教育実践学研究*,2(1),11-19.
- 松下姫歌・吉田愛 (2010) 大学生における友人関係と自我同一性との関連. *広島大学心理学研究*,9,207-216.
- 三島浩路 (2013) 高校生の仲間集団と学級適応・仲間集団の排他性と学級雰囲気との関連. *現代教育学部紀要*,5,19-27.
- 三島浩路・橋本秀美 (2009) 友人関係の排他性と学級適応感:中学生を対象とした調査結果から. *日本教育心理学会発表論文集*,51,47.
- 三浦正江・大角真由子 (2016) 中学生のネガティブおよびポジティブな出来事の実験がストレス反応, 学校ざらい感情, 学校での自己効力感に及ぼす影響. *Journal of Health Psychology Research*,29(1),13-23.
- 宮田尚子 (2007) 職場への帰属意識と相談ネットワーク:組織適応期における複合的な相談ネットワークの効果. *大阪大学年報人間科学*,28,99-116.
- 溝上慎一 (2009) 「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討 - 正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す. *京都大学高等教育研究*,15,107-118.
- 宮下一博・大野朝子 (1997) 青年の集団活動への参加とアイデンティティ. *千葉大学教育学部研究紀要 I 教育科学編*,45,7-14.
- 水野邦夫・加藤登志郎 (2008) ボランティア活動への参加は個人の心理的成長に寄与するか?:ボランティア活動経験とパーソナリティ特性,社会的スキル,充実感,ボランティア活動観の関連性からみた一考察. *聖泉論叢*,15,141-156.
- 望月由起 (2009) 初等・中等教育段階の活動経験の豊かさが大学生の職業進路成熟に与える影響. *リクルートワークス研究所 Works Review*,4(12),1-14.
- 森本寛訓 (2007) ソーシャル・サポートの互惠性と精神的健康との関連について. *川崎医療福祉学会誌*,16(2),325-328.
- 森本文子 (2008) 大学生における職業未決定とアイデンティティとの関連. *九州大学心理学研究*,9,205-213.
- Morrow, P.C., & Wirth, R.E. (1989) Work commitment among salaried professionals. *Journal of Vocational Behavior*,34(1),40-56.

- 向居暁 (2013) 大学生の正課外活動と社会人基礎力:幼児・児童教育関連学部卒業生において. 日本教育心理学会総会発表論文集,55(0),246.
- 向居暁・佐藤純 (2012) 高校生活と社会人基礎力の関連性. 日本教育心理学会総会発表論文集,54(0),187.
- 武蔵由佳・河村茂雄 (2016) 大学生における学校生活満足度と学校生活意欲との関連. 教育カウンセリング研究,7(1),35-44.
- 長濱文与・安永悟 (2010) 大学生の協同作業に対する認識の変化:対話中心授業と講義中心授業を対象に. 人間関係研究,9,35-42.
- 長濱文与・安永悟・関田一彦・甲原定房 (2009) 協同作業認識尺度の開発. 教育心理学研究,57(1),24-37.
- 永井里奈・石田靖彦 (2020) 『親和欲求と拒否不安が仲間集団指向性とグループの所属・グループの特徴に及ぼす影響』. 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要,10,10-19.
- 縄田健悟・山口裕幸・波多野徹・青島未佳 (2015) 企業組織において高業績を導くチーム・プロセスの解明. 心理学研究,85(6),529-539.
- Nevill, D.D., & Super, D.E. (1988) Career maturity and commitment to work in university students. *Journal of Vocational Behavior*,32(2),139-151.
- Noe, R.A., Noe, A.W, & Bachhuber, J.A. (1990) An investigation of the correlates of career motivation. *Journal of Vocational Behavior*,37,340-356.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996) 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化. 教育心理学研究,44(1),55-65.
- 尾形真実哉 (2016) 若年就業者の組織適応を促進するプロアクティブ行動と先行要因に関する実証研究. 経営行動科学,29(2・3),77-102.
- 小川悦史 (2012) 大学1年生のエンプロイアビリティとキャリア探索行動との関係:キャリア選択自己効力感の観点から. 青山経営論集,47(3),85-106.
- 小川悦史 (2017) 大学生の学習意欲, エンプロイアビリティ, 自己効力感および職業意識の関係 --PBL型授業の観点から-- . 大阪経大論集,68(2),65-86.
- 岡田努 (1995) 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察. 教育心理学研究,43(4),354-363.
- 岡田努 (1999) 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について. 教育心理学研究,47(4),432-439.
- 岡田努 (2007) 現代青年の友人関係と自己像・親友像についての発達的研究. 金沢大学文学部論集(行動科学・哲学篇),27,17-34.
- 岡田努 (2011) 現代青年の友人関係と自尊感情の関連について. パーソナリティ研究,20(1),11-20.
- 岡田努・榎本博明・下村英雄・山浦一保 (2016) 青年期の対人関係および自己のあり方と青年の就労意識の関連に関する構造の検討. 北陸心理学会心理学の諸領域,5(1),41-52.

- 岡田努・榎本博明・下村英雄・山浦一保 (2021) 青年の自己開示対象の多元性と認知された自己開示, 適応, 友人関係の関連. 心理学の諸領域,10(1),2-12.
- 岡村季光 (2019) 居場所 (安心できる人) の評定と自己-他者認識: 協同作業認識との関連. 奈良学園大学紀要,10,163-169.
- 奥田奈津子・松崎くみ子・山口豊一 (2015) 進路決定自己効力を高める経験についての一考察—Bandura の自己理論の観点から—. 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要,11,107-118.
- 大野朝子・宮下一博 (1997) 青年の集団活動への参加とアイデンティティ. 千葉大学教育学部研究紀要 I(教育科学編),45,7-14.
- 大山智子・登張真穂・名尾典子・首藤敏元・木村あやの (2013) 大学生の仲間関係が協調性と共感性に及ぼす影響. 日本心理学会大会発表論文集,77(0), 3EV-024.
- 應戸麻美・中島富有子 (2015) 看護大学生の「対人不安(シャイネス)」と「特性的自己効力感」の実態. 日本健康医学会雑誌,23(4),266-271.
- リクルート (1995) 日本の人事システムと人材開発についての調査.
- Rooney, R.A., & Osipow, S.H. (1992) Task-specific occupational self-efficacy scale: The development and validation of a prototype. *Journal of Vocational Behavior*,40,14-32.
- 労働政策研究研修機構 (2006) 大学生の就職・募集採用活動等実態調査結果 II. 「大学就職部/キャリアセンター調査」及び「大学生のキャリア展望と就職活動に関する実態調査」
- 酒井佳世 (2013) キャリア教育の視点による学生アルバイトとインターンシップの比較. インターンシップ研究年報,16(0),21-30.
- 崔玉芬 (2019) 大学生におけるインターンシップの意義. 関東学園大学紀要,28(0),1-11.
- 坂柳恒夫 (1996) 大学生のキャリア成熟に関する研究—キャリア・レディネス尺度(CRS)の信頼性と妥当性の検討—愛知教育大学教科教育研究報告,20,9-18.
- 佐藤有耕 (1995) 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析. 神戸大学発達科学部研究紀要,3(1),11-20.
- 佐藤浩一 (2017) 成功経験と失敗経験に対する自伝的推論とアイデンティティ発達, 適応との関連. 認知心理学研究,14(2),69-82.
- 関朋昭・溝上慎一 (2018) 部活動は「チームで働く力」を本当に育むのか: 全国規模のパネル調査を通して. 名寄市立大学紀要,12,1-10.
- 関口倫紀 (2010) 大学生のアルバイト経験とキャリア形成. 日本労働研究雑誌,602 67-85.
- 周玉慧・深田博己 (1996) ソーシャル・サポートの互惠性が青年の心身の健康に及ぼす影響. 心理学研究,67(1),33-41.
- 渋谷崇行・西田保・佐々木万丈・北村勝朗・磯貝浩久 (2018) 高校運動部活動における心理社会的スキルの日常生活への般化. 体育学研究,63(2),563-581.
- 鹿内啓子 (2008) 大学生の職業能力自己評価と職業未決定および自己効力感との関連. 北星学園大学文学部北星論集,45(2),21-32.
- 島本好平・石井源信 (2006) 大学生における日常生活スキル尺度の開発 教育心理学研



- 究,54(2),211-221.
- 清水和秋・三保紀裕 (2013) 大学での学び・正課外活動と「社会人基礎力」との関連性. 関西大学社会学部紀要,44(2),53-73.
- 清水美恵・古株ひろみ・本田可奈子・川端智子・玉川あゆみ (2015) 看護学生の志望動機と実習達成感、看護職の職業的アイデンティティとの関係. 人間看護学研究,13,1-7.
- 下村英雄・木村周 (1994) 大学生の就職活動における就職関連情報と職業未決定 進路指導研究,15(0),11-19.
- 下村英雄・木村周・堀洋道 (1997) 大学生の職業選択における自己効力感とライフタスク. 筑波大学心理学研究,19,129-138.
- 下山晴彦 (1986) 大学生の職業未決定の研究. 教育心理学研究,34(1),20-30.
- 下山晴彦 (1992) 大学生のモラトリアムの下位分類の研究--アイデンティティの発達との関連で. 教育心理学研究,40(2),121-129.
- Spencer, L.M., & Spencer, S.M. (1993) *Competence at Work: Models for Superior Performance*. John Wiley & Sons, Inc. 梅津祐良・成田攻・横山哲夫(訳) (2011) コンピテンシー・マネジメントの展開.
- Stumpf, S.A., & Lockhart, M.C. (1987) Development of the career exploration survey. *Journal of Vocational Behavior*,22,191-226.
- 菅原健介 (1998) シャイネスにおける対人不安傾向と対人消極傾向. 性格心理学研究,7(1),22-32.
- 杉森伸吉・古屋真・相川充・土井聡子・曹蓮 (2013) 「個人のチームワーク能力測定尺度」の社会人への一般化可能性の検討：因子構造の検討と異質な他者への共感性測定尺度との関連. 日本教育心理学会総会発表論文集,55(0),116.
- 杉本英晴 (2008) 「限定型」友人関係を有する大学生の就職イメージの検討. 日本教育心理学会総会発表論文集,50,761.
- 杉本英晴 (2012) 大学生の就職に対するイメージの構造. キャリア教育研究,31(1),15-25.
- 杉村和美 (1998) 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し. 発達心理学研究,9(1),45-55.
- 杉田郁代 (2013) 体育系部活動経験が大学生のレジリエンスと日常生活スキルに与える影響. 比治山大学現代文化学部紀要,(20),111-119.
- 田島祐奈・岩瀧大樹・山崎洋史 (2016) 女子大学生における進路選択に対する 自己効力および社会人基礎力の研究. 昭和女子大学紀要學苑,904,10-20.
- 高田治樹 (2018) 大学生サークル集団における行事活動の心理的成果の探索的検討. 青年心理学研究,29(2),71-89.
- 武田佳子・溝口侑・溝上慎一 (2022) リーダーシップ自己効力感とレジリエンスの関係. 日本教育工学会論文誌,46(2),229-239.
- 竹村明子・前原 武子・小林稔 (2007) 高校生におけるスポーツ系部活参加の有無と学業の達成目標および適応との関係. 教育心理学研究,55(1),1-10.

- 竹内由美 (2011) 大学生の友人関係における自己開示と孤独感の関係. 心理相談センター年報,6,15-22.
- 田中健吾 (2009) 『ソーシャルスキルと職業性ストレス-企業従業員の臨床社会心理学的研究-』晃洋書房
- 田中沙依・下田芳幸 (2013) 中学生における友人に対する感情に関する研究:自己開示および本来感との相互影響性の検討. 富山大学人間発達科学部紀要,8(1),35-45.
- 丹野宏昭 (2009) 大学生の内的適応に果たす友人関係機能. 青年心理学研究,20,55-69.
- 丹野宏昭・松井豊 (2006) 大学生における友人関係機能の探索的検討. 筑波大学心理学研究,32,21-30.
- 樽木靖夫・川田裕樹・榊原健太郎・福田八重・大日向浩・馬場千秋 (2013) 大学生の自己形成モデルの検討. 帝京科学大学紀要,9,15-23.
- Taylor, K.M., & Betz, N.E. (1983) Application of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*,22,63-81.
- 寺田盛紀・山本理恵・清水和秋 (2017) 4 年制大学生の職業的資質形勢に関する比較縦断的研究—日本、アメリカ、韓国、ドイツ—. 生涯学習・キャリア教育研究,13,23-36.
- 登張真稲・名尾典子・首藤敏元・大山智子・木村あやの (2016) 多面的協調性尺度の作成と大学生の協調性. 人間科学研究,37,151-164.
- 徳永沙智・稲畑陽子・原田素美礼・境泉洋 (2013) シャイネスと被受容感・被拒絶感が社会的スキルに及ぼす影響. 徳島大学人間科学研究,21,23-34.
- 富永美佐子 (2008) 進路選択自己効力に関する研究の現状と課題,キャリア教育研究,25 (2),97-111.
- 富安浩樹 (1997) 大学生における進路決定自己効力と時間的展望との関連,教育心理学研究,45(3),329-336.
- 友田貴子・根岸佳奈 (2016) 大学の運動部への所属とレジリエンスおよび楽観性との関連について. 埼玉工業大学人間社会学部紀要,14,41-46.
- 豊田弘司 (2006) 大学生の自尊感情と自己効力感に及ぼす随伴・非随伴経験の効果. 教育実践総合センター研究紀要,15,7-10.
- 豊田弘司 (2016) 努力と結果の随伴性、感情及び動機づけの関係. 次世代教員養成センター研究紀要,2,19-25.
- 豊田弘司・濱邊友里・浦瑞帆 (2013) 学習場面における随伴経験尺度の開発. 教育実践開発研究センター研究紀要,22,27-33.
- 辻川典文・神原歩 (2020) 進路選択に対する自己効力と学生時代の達成経験、就職活動時のソーシャルサポートの関連性—内々定獲得経験による調整効果の検討—. キャリア教育研究,39(1),13-24.
- 上野耕平 (2014) ライフスキルの獲得を導く運動部活動経験が高校生の進路成熟に及ぼす影響. スポーツ教育学研究,34(1),13-22.
- 浦辺諒子 (2013) 大学生新入生の無気力傾向に関する一考察 —ソーシャル・サポート、自己開

- 示傾向との関連一. 創価大学大学院紀要,(35) ,171-188.
- 浦上昌則 (1994) 女子学生の学校から職場への移行期に関する研究:「進路選択に対する自己効力」の影響. 青年心理学研究,6(0),40-49.
- 浦上昌則 (1995) 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究,名古屋大学教育学部紀要教育心理学科,42,115-126.
- 浦上昌則 (2015) 中高校生時代のどのような生活経験が大学生の職業観に影響するのか. アカデミア(人文・自然科学編),10,31-44.
- 浦上昌則 (2017) 学生の職業的アイデンティティの検討:30年前との比較を通して. アカデミア, 人文・自然科学編,13,71-84.
- 宇都宮真輝 (2018) 大学生におけるアイデンティティ発達と学業・友人・家族機能との関連— 学生生活サイクルの視点から—. 吉備国際大学研究紀要(人文・社会科学系),28,27-43.
- Valero, D., & Hirschi, A. (2016) Latent profiles of work motivation in adolescent in relation to work experience, goal engagement, and changes in work experiences. *Journal of Vocational Behavior*,93,67-80.
- Vroom, V.H. (1964) *Work and motivation*. John Wiley,& Sons. 坂下昭宣・榊原清則・小松一・城戸康彰(訳) (1982) 『仕事とモチベーション』 千倉書房.
- 若林満・後藤宗理・鹿内啓子 (1983) 職業レディネスと職業選択の構造—保育系, 看護系, 人文系女子短大生における自己概念と職業意識との関連— 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科),30,63-98.
- 若林満・後藤宗理・鹿内啓子 (1985) 女子大生における職業選択過程の予測的研究(II) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科),32,287-310.
- 若松養亮 (2001) 大学生の進路未決定者が抱える困難さについて,教育心理学研究,49 (2),209-218.
- 渡部麻美 (2018) 社会人における“コミュニケーション力”イメージと態度との関連. 対人社会心理学研究,18,155-163.
- 渡辺舞 (2014) 大学生の友人関係は変化するか?:大学 4 年間の追跡的検討による大学適応感との関連について. 北星学園大学大学院論集,5,67-81.
- West, M.A. (2012) *Effective Teamwork: Practical Lessons from Organizational Research*, 3rd. Editon. John Wiley & Sons Ltd.
- Westbrook, B.W., Sanford, E.E., O'Neal, P., Horne, D.F., Fleenor, J., & Garren, R. (1985) Predictive and construct validity of six experimental measures of career maturity. *Journal of Vocational Behavior*,27,338-355.
- 八木成和 (2016) 男子大学生の大学生活への適応に関する研究—対人関係の困り感と適応感、自尊心との関連—. 四天王寺大学紀要,62,163-174.
- 谷口弘一・浦光博 (2003) 児童・生徒のサポートの互恵性と精神的健康との関連に関する縦断的研究. 心理学研究,74(1),51-56.

浅井千秋

- 山田みき・岡本祐子 (2008) 「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティ:対人関係の特徴の分析. 発達心理学研究,19(2),108-120.
- 山田有莉 (2019) 青年期女子におけるおそろい行動:被異質視不安及び異質拒否傾向・適応感との関連. 金城学院大学大学院人間生活学研究科論集,19,1-12.
- 山際勇一郎・堀洋道 (1991) 援助行動に影響を及ぼす性格特性の総合的検討. 筑波大学心理学研究,13,113-119.
- 山本理恵・三保紀裕・寺田盛紀 (2017) 大学生の就労経験と職業観、職業基礎力の関連 日本、アメリカ、ドイツの国際比較. 京都学園大学経済経営学部論集,4,45-65.
- 山本友美子・堀匡・石垣琢磨・大塚泰正 (2008) 大学生におけるソーシャルサポートの互恵性変化と抑うつとの関連:性別およびサポート機能別の検討. 広島大学心理学研究,7,245-253.
- 矢野紀子・羽田野花美・酒井淳子・澤田忠幸 (2006) 看護系大学生の職業コミットメント:入学後2年間における経時的変化. 愛媛県立医療技術大学紀要,3(1),59-66.
- 保田江美・溝上慎一 (2014) 初期キャリア以降の探求. 中原淳・溝上慎一(編)『活躍する組織人の探求-大学から企業へのトランジション-』 東京大学出版会,139-174.
- 矢崎裕美子・中村信次 (2018) 社会福祉実習経験によるコンピテンシーの変化ー動機と実習によるバーンアウトに着目してー. 日本福祉大学社会福祉論集,138,63-74.
- 米田照美・川端愛野・伊丹君和・清水房枝 (2015) 看護学生の協同作業認識と大学生生活の経験との関連性. 人間看護学研究,13,29-34.